

文學士津田成文校

中學 東洋歷史 全

中等學校教授法研究會

中學 東洋歷史

例言



一本書は尋常中學校及これと同程度の諸學校に於ける、東洋歷史科教科用書に充てんが爲に編纂せるものなり。故に本書は一に簡明を主とし、項目を省かずして紙數を寡くせんことを務められたは、其延約取捨は舉げて教授諸彦の方寸に委せんのみ。一本書に我紀元を用ゐずして西洋紀元を採りたるは、世界歷史の他の一半たる西洋歷史と對照するの便を得せしめんが爲なり。但し書中、殊に重要な時期には、日本紀元をも併記せり。一別冊に輯録せる東洋歷史地圖及附録は、本書閱讀の際常に參照あらんとを望む。

明治三十年十二月

編者 識

108
138

中學東洋歷史

例言



一本書は尋常中學校及これと同程度の諸學校に於ける、東洋歷史科教科用書に充てんが爲に編纂せるものなり。故に本書は一に簡明を主とし、項目を省かすして紙數を寡くせんことを務められたれば、其延綿取捨は擧げて教授諸彦の方寸に委せんのみ。一本書に我紀元を用ゐるすして西洋紀元を採りたるは、世界歷史の他の一半ある西洋歷史と對照するの便を得せしめんが爲なり。但し書中、殊に重要な時期には、日本紀元をも併記せり。一別冊に輯録せる東洋歷史地圖及附録は、本書閱讀の際常に參照あらんことを望む。

明治三十年十二月

編者識

中學
東洋歷史
目次

第一章 總論

第一節 東洋歷史……………一

第二節 地理……………二

第三節 人種……………四

第二章 三皇五帝及三代時代……………六

第一節 三皇五帝……………六

第二節 夏殷……………八

第三節 周の初葉……………九

第四節 春秋……………一三

第五節 戰國……………一六

第六節 三代の學術……………二〇

第三章 秦漢時代

- 第一節 秦……………三三
- 第二節 西漢の初葉……………三五
- 第三節 孝武皇帝……………二八
- 第四節 武帝以後の西漢……………三三
- 第五節 東漢の初葉……………三六
- 第六節 佛教の東流……………三九
- 第七節 東漢の末葉……………四三

第四章 魏・晉・南北朝時代

- 第一節 三國……………四六
- 第二節 兩晉及五胡の紛争……………五〇
- 第三節 鮮卑の全勝……………五三
- 第四節 南北朝……………五七

第五章 隋唐時代

- 第一節 隋……………六一
- 第二節 唐の創業及外征……………六三
- 第三節 唐の中世……………六八
- 第四節 唐の末世……………七四
- 第五節 學術宗教……………七七

第六章 五代及兩宋時代

- 第一節 五代……………八一
- 第二節 宋の創業及遼夏の入寇……………八六
- 第三節 朋黨の紛争……………九一
- 第四節 遼金の興廢……………九四
- 第五節 蒙古の勃興……………一〇一

第七章 元明時代

- 第一節 元の盛世……………一一三

第二節 元の衰亡……………一四六

第三節 宗教……………一二〇

第四節 明の初葉……………一二一

第五節 外患の頻繁……………一二五

第六節 明の末葉……………一三〇

第七節 西南諸國……………一三五

第八章 清朝時代……………一四〇

第一節 清の進取上……………一四〇

第二節 清の進取下……………一四四

第三節 歐人の東侵……………一四八

第四節 清の退守上……………一五三

第五節 清の退守下……………一六〇

中學 東洋歴史目次終

中學 東洋歴史

中等學科教授法研究會著

第一章 總論

第一節 東洋歴史

東洋歴史の範圍 東洋歴史は世界歴史の一半にして、東洋殊に亞細亞の東半に興亡せる諸國民の歴史を云ふ、蓋し此地の住民は山河懸絶して西洋諸國民とは自ら特別の發達をなし、を以て、この區劃を設けて、其文明を追跡するを便とすればなり。

東洋歴史組織法の異同 支那を以て東洋歴史の大中心となすべきは論無しと雖も、若し東洋歴史を以て、西洋歴史に漏れたる重なる東洋の史流を悉く包含せしめんと欲せば、勢ひ支那以外に

東洋歴史
何ぞや

東洋歴史
必の中

一二の中心點を求めざる可からき。何となれば亞細亞は世界最大の大陸にして、中に世界最高の山脈を有し、國民相互の交通影響時に極めて不完全なるをありしを以てなり。然れども、本書はもと中等教育を主とする教科書なるを以て、今其最も簡明なる組織法を採用し、支那を中心として之に關聯せる諸國民を併記し、その他は便宜省略に従へり。

第二節 地理

三大山脈 山脈 亞細亞の諸大山脈は、皆世界の屋根と稱せらるるパミール高原より發せり。西に走れるを興都克士山脈といひて、中央亞細亞とイラン高原とを分ち、東北に走れるを亞爾泰山脈といひて、支那と西比利亞とを分ち、東南に走れるを喜馬拉耶山脈といひて、印度と支那とを分てり。又亞爾泰山脈と喜馬拉耶山脈との間には、天山

黃河
揚子江
ガンガ
印度河
シール
河

及崑崙山の二山脈ありて、恰も扇骨の如く東走し、殊に崑崙山脈は支那本部に入りて南嶺北嶺及陰山山脈を分支し、支那諸民族の興廢に大影響を與へたり。水域 水域は山脈の配置によりて定る。今東洋史上最も緊要なるものを擧ぐれば、東方には支那文明の發生地たる黃河と、土地豊饒氣候溫和なるを以て、歴世諸民族の争點となれる揚子江との二大水域あり。南方には有名なるガンガ河の水域ありて、アリア人種の搖籃となり、印度河の水域は、佛教徒と回教徒との争點となれり。土耳其斯坦の地は、現時荒蕪に歸し、伊犁河の水域のみ稍肥沃なりといへども、古昔はシール、アム、二河の水域は實に東西交通の要路たりき。

現代政治上の區劃 古今對照の方便として現代政治區劃の大要を擧げん。亞爾泰山喜馬拉耶兩山脈の間は、清と朝鮮との分領する

支那

朝鮮

英領印度

東印度

イラン高原

中央亞細亞

所にして、清は其國を分ちて支那本部直隸山東山西河南陝西甘肅江蘇安徽浙、雲南の十滿州江の三省、蒙古内外、伊犁、青海、西藏前藏後藏の六部となし、朝鮮は之を分ちて京畿、忠清、全羅、慶尙、咸鏡、平安、江原、黄海の八道となす。喜馬拉耶山脈以南に於ては、英吉利人最も勢力を有し、其領土を分ちて十二直轄州緬甸アッサムベングール北緯州オウダハスジャブ中、及數藩部となし、佛蘭西人は交趾、支那を有し、且つ安南及東蒲塞を其保護國となせるを以て、純然たる獨立國は僅に暹羅の一國を存するのみ。又イラン高原の地は、波斯、阿富汗、斯坦、俾路、芝斯坦の三國に分れ、中央亞細亞は、ヒロ、アハラの二小藩國を存して、他は皆露西亞に併呑せられたり。

第三節 人種

黄色人種

古來東洋の天地に興廢せし諸民族は概ね所謂黄色

二大派

支那派

西比利亞派

人種に屬せり。人類學上之を分ちて二とし、一を支那派といひ、一を西比利亞派といふ。西西比利亞派といふ。西更に支那派を分ちて漢、圖伯特、印度支那の三種となす。漢種は支那中華の人民にして、古史に夏人と稱せり。圖伯特種は即ち西藏の住民にして、嘗て氐、羌、吐蕃、黨項等を出せり。印度支那種は東印度及支那南部の住民にして、古史に苗、瑤、越等の名ある者是なり。西西比利亞派を分ちて通古斯、蒙古、土耳其、古韓の四種となす。通古斯種は今滿州の地に散住せる人民にして、金、清の二大國は共に此種より起れり。蒙古種は即ち蒙古の住民にして、周に東胡といひ、漢に烏桓、鮮卑といひ、晋末に北朝を立て、唐末に遼を立て、又宋末に元を興し、東洋史上に大勢力を有したり。土耳其種は現今新疆省以西に住し、史に獯鬻、獫狁、匈奴、柔然、突厥等の稱ある者皆是なり。

白色人種 所謂白色人種は葱嶺以内に入らざりしを以て、東洋

人アリア
人シニム

の史劇に與ること割合に少しと雖も、印度に侵入せしアリア人は、
佛教を創めて東洋諸國民の信仰を一變じ、イラン高原に留りしシニ
ム人は時々中央亞細亞に侵入して黄色人種と衝突せり。

第二章 三皇五帝及三代時代

第一節 三皇五帝

三皇 支那の文化は今を距る大凡五千年前西方より來りて黄河
の沿岸に繁殖せる漢種に始れり。傳説によれば國初の三皇の稱あ
りと雖も、今はその名號たに確知する能はず。按ずるに當時未だ一
統の君主かく諸大族各、其君長を奉じて各地に割據せしが如し。三
皇に次ぎて五帝の名あり、其事蹟稍考ふ可し。

五帝 五帝の第一を黃帝と稱す。有熊國河南府より起りて、神農を阪
泉の野に破り、蚩尤を涿鹿直隸省に擒じ、都を涿鹿に定めて空桐甘

支那文
化の起
原

實帝

顓頊
帝

帝堯

帝舜

葷粥

州 以東江水揚子以北の地を奄有せり。黃帝の後顓頊帝嚳の二帝を
經て帝堯に至れり。

帝堯は帝嚳の子にして、都を平陽山西府に定め、先づ義和二氏を四方
に遣して曆法を測定せしめ、舜で蘇をして天下の大洪水を治めし
めたり。然るに蘇遂に功を奏せざりしかば、乃ち舜を猷畝の中より
擧げて萬機を委ね、且つ之に帝位を讓れり。

帝舜は瞽瞍の子にして帝堯の女婿なり。位に即くに及びて都を蒲
坂山西府に定め、禹を登庸して九州豫州の水土を治めしめ、四凶
の罪を正し、巡狩述職の制を設けて、大に帝權を固からしめ
たり。帝堯は陶唐氏、帝舜は有虞氏なるを以て此二代を併せて唐虞
の代と稱し、後世の儒者は最も之を稱述せり。

五帝の攘夷 三皇の代、漢種の領有せしは僅に黄河沿岸の地に
止り、其他は皆異種族の據る所に於て、南方の三苗と北方の葷粥

三苗

三苗は、こゝも書す後には漢統又は匈奴といへる人種と同一なりとは殊に強盛なりしが、黃帝出づるに及び、先づ師を北方に用ゐて、葷粥を陰山以北に擊退し、更に地を西南に拓きぬ。是に於て、北狄は一時屏息せしと雖も、三苗は依然として勢盛なりしかば、黃帝以後の諸帝は専ら南方を經營し、帝舜の如きは三苗を征して、遂に蒼梧の野湖南省永州府に崩じき。

第二節 夏殷

大禹

王位世襲

夏の始祖を大禹と稱す。顓頊の後にして、鯀の子なり。治水の功を以て帝舜の禪を承け、安邑山西州に都して國號を夏といへり。禹崩じて子啓位を繼げり。之を王位世襲の始とす。以て禹が能く諸君長を鎮壓して中央集權の實を擧ぐることを得たりしを知る可し。啓の孫相に至り、有窮の後羿及び其の臣寒泥の亂ありしが、相の子少康之を平けて再び國勢を挽回し、後十世を歴て桀に至り、

少康 桀

成湯

國政大に亂れて遂に成湯の爲に滅されぬ。時に西紀前十八世紀なり。殷の興亡 成湯は亳河南省亳縣に起りて先づ四境を討平し、遂に伊尹の謀を用ゐて夏桀を南巢河南省巢縣に放ち、帝位に上りて國號を商といへり。蓋し湯は唐虞の際に司徒となりて商に封せられたる契の後なればなり。

太戊 盤庚

紂

湯より六世を歴て太戊に至り、善く國政を修めて中宗と號せられぬ。盤庚の時、都を殷河南省に遷して國號を殷と改め、西紀前一四〇〇年頃其後二世を歴て武丁に至り、傳説を相として國威大に振ひたりしが、是より殷室漸く衰微に傾き、暴王紂に至りて、遂に周の武王の爲に滅されたり。時に西紀前一一二三年なり。

第三節 周の初葉

姬棄

文王

武王

封建の制

周の基業 周の武王は姫棄の後なり。棄は唐虞の際に后稷となりて郃州に封せられ、古公亶父岐山に至りて、獯鬻の患を避けて岐山の下岐山に邑し、始めて夷風を脱して宮室を營み、國號を立て、周といへり。其孫昌は即ち有名なる文王にして、殷の紂王の爲に西伯伯の長なりに任せられ、都を豊陝西に定めて天下の三分の二を保有せり。

文王没して子武王發の立つに及び、殷は國政日に亂れて人心全く王室を去りしかば、武王は諸侯を率ゐて紂王を當時の殷都朝歌河南の南郊に破り、王位に上りて鎬京陝西に都し、封建の制を依用し、中央の地方千里を畫して之を王畿となし、其他を五服向侯、甸、男、采、衛、蠻、夷、鎮、藩、采、衛、蠻、夷、鎮、藩に分ちて、同族功臣及貴族後裔を分封せり。太公望の齊に、周公旦の魯に、召公奭の燕に、武康の殷に、また箕子の朝鮮に封せられたるが如し、而して當時封土を得て列侯たりし者、兄弟に十五人、同姓

五等爵
三等土

周公

鎬京と洛邑と

に三十八人、異姓に十八人ありき。

又周は諸侯を公侯伯子男の五爵に分ち、公侯には地方百里を與へて大國と稱し、伯には七十里を與へて次國と稱し、子男には五十里を與へて小國といひ、五十里以下は附庸といひて之を諸侯に隸せり。

成康の治 武王崩じて子成王立ちしも、歳尙幼にして萬機を握るる能はざりしかば、周公太宰となりて諸政を攝行し、殷民の亂を平けて治を天下に布き、禮樂制度を修めて範を後世に垂れたり。既にして成王長せしかば、周公乃ち政を還へし、洛邑河南に東都を營み、西都即ち鎬京と相並びて海内を控制するの策を全ふし、且つ召公と共に東西に呼應して成王を輔翼し、召公はまた畢公高と共に成王の子康王を相けたり。是に於て周の國威は全盛の極に達し、内は刑罰を用ゐざること四十餘年、外は越裳氏より三譯を

重ねて來貢するに至れり。

昭王弒せらる

周室の衰弱 康王崩じて昭王立つに至り、國威漸く衰へて四夷

交侵し、王は南巡して遂に楚人の爲に弒せられたり。穆王嗣立する

徐戎 犬戎

に及び西紀前一年東に徐戎の亂なり、西に犬戎の反あり、王乃ち兵を出

して之を征せしと雖も、是より諸侯漸く專横にして王室を凌ぎ、戎

狄益、中國に侵寇するに至れり。其後四世を歴て厲王に至り、暴政を

行ひて敢て顧みる所なかりしかば、國人王を逐ひて其子宣王を擁

立しき西紀前八二七年

宣王の中興

宣王聰明にして攘夷に力を盡し、親ら兵を率ゐて徐戎を征し、秦仲

をして西戎を伐たしめ、召穆公をして淮夷を定めしめ、方叔をして

荆蠻を征せしめ、尹吉甫をして玁狁を討せしめ、一時中興の業を全

ふせしと雖も、その子幽王の世に至り、申后及び太子宜臼を廢せし

申侯の反

かは、申侯は犬戎を誘ひ來りて王を驪山の下に攻殺しき。

周室の東遷

時に晋の文侯、衛の武公、秦の襄公等各兵を帥ひて來援し、犬戎を撃

退し、宜臼を立てし平王となししと雖も、平王は戎狄の勢遂に當り

難きを察し、西都を棄てし東都に遷れり。是を周室の東遷と稱す。時

第四節 春秋

春秋

春秋十二列國 春秋とは孔子の春秋に記載せる時代の總稱に

して、平王の四十九年より敬王の三十九年に至るまで、前後二百四

十二年の間をいふなり。周室の盛大なりし間は、諸侯皆三等の制大

小國を守りて、領土の懸隔未だ甚しからざりしが、その衰弱するに従

ひ、漸く併吞奪略の風を生じて、三等の制は全く破れ、春秋の代に至

りては、強國の存する者僅に齊、楚、晋、秦、魯、衛、宋、燕、鄭、曹、陳、蔡の十二と

なれり。其中魯、衛、晋、鄭、曹、蔡、燕の七國は周と同姓なるも、その他は皆

十二列國

異姓の國にして、楚の如きは實に南蠻より起りて王と稱せしものなりき。

戎狄の侵入 周室の衰微と共に諸侯國の内訌攻略は絶ゆる間無かりしかば、戎狄は之に乗じて深く内地に侵入せり。今其著明なる者を列擧すれば、雍州には犬戎、隴戎、白狄あり、冀州には赤狄、北狄あり、幽州には東胡、山戎あり、豫州には陸渾、茅戎あり、青州には長狄あり、揚州には淮夷あり、楚は南蠻を率ゐて北侵し、秦は西戎を併せて東進せんことを圖れり。

犬戎

東胡

楚と秦

齊の桓

五霸の交立 是に於て、齊の桓公先づ起りて大に尊王攘夷を唱へ、中國の諸侯を鄆山東省曹州府に會して四紀前六七九紀前始めて覇業を成し、山戎を退けて燕を救ひ、狄を攘ひて衛を復し、又楚を伐ちてその周に朝貢せざるを責めたり。霸は伯にして諸侯の盟主なり。桓公の薨後、宋の襄公、晋の文公、秦の繆公、楚の莊王相次ぎて一時諸侯の盟主たりし。

宋の襄

を以て、後世之を稱して春秋の五霸といへり。宋の襄公は五霸の最も微弱なる者なり。然れども嘗て桓公の遺托を受けて齊の孝公を擁立せしを以て、一時能く中國諸侯の牛耳を握りしが、楚と泓水名にして河にありに戦ひて傷き死し、晋の文公代りて中國に霸たり。

晋の文

文公先づ周の襄王の狄人に逐はれしを位に復して、尊王攘夷の實を示し、次に宋の楚に圍まれしを救ふて、大に楚軍を城濮山東省曹州府に破り、遂に諸侯を踐土河南府開封府に會して勤王の盟をなせり。

秦の繆

是時に方り、秦の繆公は百里奚、蹇叔等を擧げて内政を修め、由余を用ゐて西戎の地を攻略し、遂に霸を陝西に稱して山東の晋と東西に相對峙し、屢兵を交へて互に勝敗ありき。

楚の莊

繆公薨するに及び四紀前六二一年晋は稍西顧の憂を免かれしと雖も、久しからずして楚に莊王起れり。莊王は南方の諸國を併せて北進の雄

圖を懷き、庸を滅し、宋を伐ち、陸渾の戎を討じ、遂に兵を洛水に進めて周を威嚇し、人をして鼎の輕重を問はしむるに至れり。而してその更に鄭を伐つに及びて始めて晋と衝突し、晋の援兵を鄭河南府破りて威を河南に振へり。

闔廬

吳越の交戦 莊王の死後七十餘年にして、楚の東に吳王闔廬起り、楚の亡臣伍子胥を用ゐて楚を侵略し、或は國都郢湖北省荊州府に至り、或は巴蜀に及びり。然るに越王勾踐吳と合はずして其虚を襲ひしかは、吳越の交戦爰に端緒を開けり。闔廬は越を伐ちて遂に敗死せしと雖も、子夫差に至り、大に越軍を夫椒に破りき。是に於て勾踐は一旦吳に屈從したりしが、范蠡を用ゐて兵を鍊り、二十年を経て全く吳を討滅し四紀前四七三年貢を周の元王に致して伯となれり。

勾踐

夫差

第五節 戰國

戰國

戰國七雄 戰國とは春秋以後、秦の統一四紀前二二一年に至る二百六十年間の總稱なり、五霸迭立の時代に於ては、大義名分尙未だ地を拂はざりしが、春秋の末世より戰國に亘りては、皆に諸侯の相呑噬するのみならず、諸侯の臣下のその主家を篡奪せる者も亦少からず、晋の韓魏趙の三氏に篡はれ、齊の田氏に奪はれたるが如し。されば春秋時代の強國にして戰國に残存せるは、僅に秦楚燕の三國あるのみ。其他衛魯宋鄭の如き、尙多少の封土を保有せしと雖も、到底以上の大國に敵すべくもあらざりき。

七雄

秦の強盛 かくて七雄は互に兵を交へて疆土の侵略を圖りしが、中國の諸侯は力相當りて未だ之を統一する者なく、楚は領土大なりと雖も、吳の侵寇ありし以來國勢痛く傾きて、未だ莊王の舊に復すること能はず、獨り秦は繆公の遺業を承けて孝公に至り、更に商鞅を用ゐて富國強兵の術を講じ、將に山東諸國を併呑せんとす

孝公

るの勢を示せり。

蘇秦

合從連衡 是に於てか、山東の諸侯は皆恐怖の念を懷きたりし

合從

かば、蘇秦は之に乗じて合從の説を唱へ、先づ燕の文公に見えて趙と從親するの利なるを説き、次に趙に赴きて肅侯に見え、趙、燕、韓、魏、齊、楚の六國相合從して共に秦に當るの急務なることを説けり。肅侯之を聽きて大に喜び、厚く蘇秦に賜ひて更に他の諸國を遊説せしめし。かば、蘇秦は順次韓、魏、齊、楚の四國に歴遊して諸侯の同意を求め、遂に從約を全ふして趙に歸りぬ。時に西紀前三三三年なり。然るに秦は之を聞きて大に懼れ、翌年謀を以て齊、魏を欺きて趙を伐たしめ、かば、蘇秦燕に奔りて從約全く瓦解せり。

張儀

時に張儀は秦に仕へて連衡の策を講じ、先づ楚、趙、韓、魏、燕の聯合軍を破りて秦の威力を示し、尋で魏の相となりて魏王を秦に服事せしめ、次に詭計を回らして楚の懷王を説服し、更に韓、齊、趙、燕の四國

連衡

を誘ひ、連衡して秦に事へしめたり。時に西紀前三一一年なり。

秦の統一 張儀の連衡も亦其翌年を以て破れ、以後山東の諸侯

は、或は合し或は散じて攻戰止む時なく、就中燕、趙二國の如きは夷

族東胡、林胡、樓煩の侵寇を蒙るる甚し、因て秦は連年兵を用ゐて山東に地

を拓きしが、昭襄王の立つに至り、白起を將とし、范雎を相として益

楚、韓、魏、趙を伐てり。

西周亡

時に周は東西に分れて、赧王西周にあり、命を列國に下して將に秦を擊退せしめんとせしかば、秦は直に兵を進めて西周を滅し、後七

東周亡

年にして東周の惠公を降せり、時に西紀前二四九年にして、武王の建國より是に至る迄、凡三十八世八百七十餘年なり。

政

尋で秦は孝文、莊襄二王を経て政の治世となり、即位の十七年には韓を滅し、十九年には趙を滅し、二十二年には魏を滅し、二十四年には楚を滅し、二十五年には燕を滅し、二十六年には齊を滅して始め

なり、名家は詭辯を弄して人を説服せる學派にして、公孫龍最も著名なりき。

第三章 秦漢時代

第一節 秦

中央集權
書を焚

始皇帝 始皇帝は皇紀四四〇年を以て、六國を併せて天位に上り、咸陽の舊都に據りて大政を一身に聚めたり。蓋し秦は武を以て亂麻の如き天下を統一せしを以て、其政治は自ら中央集權ならざるを得ず是を以て、帝は李斯の言を用ゐ、大に朝制を改革して帝位を尊嚴ならしめ、郡縣の制を海内に布きて、荆楚齊燕の遠地にも諸侯を置かず、屢各地に巡幸して人心の威壓を圖り、且つ度量衡の標準を定め、車軌文字をも同一ならしめたり。帝は書を焚き、儒を坑にせり。蓋し當時は戰國の餘勢を承けて、學界

坑にす

は尙擾亂の中であり、學者各自家の學説を主張して互に相排濟し、殊に儒生は保守主義を守りて秦の革新に反對せしかば、帝は思想界の統一を圖らんが爲に、法術を揚げて儒學を抑滅せしなり。

匈奴

當時匈奴と稱して北方に威を振ひし土耳其人種は、周代には獯鬻又は獯豸といひて秦趙二國の北邊に侵入し、嘗て大に趙の武靈王に撃退せられしも、尙屢南侵の勢を示し、かば、帝は蒙恬に命じ、兵三十萬を發して之を伐たしめ、西紀前二一五年悉く河南の地を取りて所謂萬里の長城を修築せしめたり。周末に當り燕趙秦の三國は皆其北境に長城を築き、初秋を防げり故に帝は之を連結大成せしめりしなり

万里長城

南越を征す

かく秦の國威は北は陰山以外に振ひしと雖も、南方には印度支那種に屬せる南越の頗る邊境を擾るありしかば、帝は之を征して今の安南の地に及び、桂林南海象郡の三郡を置き、謫民五十萬を徙して之を守らしめたり。

項籍 劉邦 章邯

群雄の蜂起 秦の統一は始皇其人を俟ちて始めて成りし者なり。故に之を保持せんには復第二の始皇を要す。然るは始皇崩じて二世皇帝繼くや、施政當を得ず、綱紀忽ち亂れて群雄各地に蜂起せり。即ち陳勝、吳廣等は兵を斬安陽府に興して趙、魏の地を徇へ、項梁、項籍字は羽等は兵を吳に興して楚の懷王を擁立し、劉邦は沛江蘇省徐州府に起り、田儻は齊に起れり。

秦の滅

是に於て、將軍章邯は二世皇帝の命を奉じ先づ魏を伐ちて田儻、項梁等を攻殺し、遂に進みて趙に入れり。然るに項羽は之を鉅鹿直隸省鉅鹿府に降して、諸侯の上將軍となり、劉邦は尋で懷王の命を以て、關中に進めり。時に秦は二世皇帝既に趙高に弑せられて公子嬰位に在りしが、劉邦の覇上に至るに及び、出で降りぬ。實に西紀前二〇六年なり。

漢楚の攻争

時に項羽も亦河北の地を定めて關中に入り、擅に

劉邦漢王とな

諸將を分封し、劉邦には漢中を與へたり。初め懷王諸將に約して曰く、先づ關中に入る者は其地の王たるべしと。因て漢王頗る項羽の處置を怒りしと雖も、蕭何の諫を納れて窃に時期の至るを俟てり。然るに項羽は公子嬰を殺し、又始皇の墓を發きて秦民の怨を買ひ、且つ自ら西楚の霸王と稱して義帝懷王此時を放弑せしかば、漢王乃ち義帝の喪を發して征楚の師を募り、遂に羽を垓下安徽省鳳陽府に破りて帝位に即けり。之を西漢の高祖と稱す。時に西紀前二〇二年なり。

第二節 西漢の初葉

秦の舊による 封建を再興す

高祖の内政 高祖の内政は頗る治國の要を得たり。先づ制度、法律は秦の舊によりて、甚しき改革を行はず。三族の誅夷、挾書の禁等の苛法をも尙之を存せり。帝は秦の郡縣の制を以て蚤く亡びたるに鑑み、封建の制を再興し

て秦の遺制に交へたり。然れども創業の諸功臣を封するには、或は位次を高めて封戸を減じ、或は同族の諸侯を其間に配置して之を控制せしむる等頗る注意を施し、又若し異姓の諸侯にして忌むべき者あれば、直に之を誅除して其地に宗族を封せり。

匈奴

漢初の外交 秦末の亂に乗じて、匈奴は漸く南侵の師を出し、殊

に冒頓單于天子の號なりの立ちじより、兵威益強く、東は東胡を破り、西

は月氏を逐ひ、南は嘗て蒙恬に奪はれたる地を悉く復して遂に燕

白登

代に寇し、馬邑、晋陽に及びり。是に於て高祖は親征して白登山西府に

至りしが、敵の重圍を受けて志を達する能はず、乃ち劉敬の策によりて之と婚を結び、且つ弊物を贈りて偏に單于の甘心を買へり。

漢初の諸帝は孰れも高祖の政策を守りて敢て事を北に構へざり

しかば、匈奴大に傲り、高祖崩するに及びては、無禮の書を呂太后に

送り、惠帝の崩御に際しては、狄道甘肅省州府に寇し、文帝の世には重ねて

匈奴の暴を忍ぶ

北地陝西府、河南山西に寇せしが、漢は尙之を忍びて宗室の女を單于

に嫁せり。

南海の處置

次に漢の對南策を一言せん。秦末南海郡の尉趙佗なる者起り、桂林

象郡の二郡を併せて自ら南越王といへり。既に於て高祖天下を一

統せしも南征に遑なく、僅に使を派して佗を削封せしに過ぎざり

しかば、佗は益専恣にして、呂太后の時より南武帝と稱せり。但し文

帝の時に至り、慰諭して帝號を去らしめしと雖も、實權は依然とし

て佗の手中に存しき。

七國の反 惠帝の時呂太后攝政となり、呂氏の一族政權を握り、

帝位も亦將に其有とならむとせしかば、齊王襄は劉氏の諸王を率

ゐて呂氏を討滅し、文帝を立て、高祖の遺意を達せり。

然れども是より諸王漸く専横にして、窃に異志を懷く者ありしか

ば、鼂錯は文帝に勸めて、先づ齊と淮南とを分割せしめしが、景帝立

齊王呂氏を平

鼂錯

七國の亂

つに及び、更に帝に勸めて趙楚膠西の三國を削らしめたり。かくて鼂錯の意見は着々その功を奏せしといへども、尋て吳を削るに及び、吳王濞遂に反旗を翻し、謀を膠西膠東菑川濟南楚趙の六國に通じて、所謂七國の亂を作せり。西紀前一四一是に於て帝は周亞夫に命じ、三十六將軍を率ゐて之を討平せしめ、痛く諸侯の力を殺ぎて後禍を斷てり。

第三節 孝武皇帝

一偉人

武帝の偉業 孝武皇帝は景帝の子にして、其治世は西紀前一四〇年より同八七年に亘れり。帝は實に東洋史上の一偉人にして、内は大に文教を興して思想界に一新時期を開き、外は屢遠征の師を出して地を四方に拓き、且つ使を西域に遣して始めて白人の文明を漢土に輸入せり。今左に其一班を摘記すべし。

學界の統一

儒學の擁護 惠帝挾書の禁を解き、文帝益遊學の道を廣めしと雖も、當時は尙秦の餘勢を承けて、學者皆黃老の學を尊び、儒學は微々として振はざりき。武帝大に儒學を好み、董仲舒及衛綰の議を納れて悉く他の諸學派を排し、大學を興し、五經博士を置きて學界の統一を圖れり。是に於て儒學は始めて學界の主權を握りて、董仲舒孔安國等の大家を出し、文辭も亦之と共に進みて司馬遷司馬相如等を出せり。

衛青

霍去病

匈奴の征討 匈奴は文景以來益驕恣にして、常に漢の大患たりしかば、帝は専ら之が征討を圖り、先づ謀を以て軍臣單于を誘撃せんとせしむ中途にして、その謀破れ、單于の侵寇愈甚しかりき。帝乃ち衛青を將とし、悉く河南の地を略して朔方五原の二郡を置き、尋て霍去病を遣ひ、今の甘肅省の地を取りて、武威酒泉の二郡後この二郡を割きを置き、後匈奴の稍衰ふるに乘じて、更に兩將を漠北に出

て張掖敦煌の二郡を置く

し、青は闐顔山に至り、去病は狼居胥山に至りて還れり。西紀前一是に於て匈奴は始めて漢の勢威に屈し、遠く北に遁れて漠南王庭なきに至れり。

南越

南方諸國の討滅

當時南方には南越廣東省、閩越福建省、東甌浙江省の

東甌
閩越
東越

三國あり。東甌先づ閩越に攻められて江淮の間に移りしが、次で閩越に内亂ありて東越新に其遺地に興りたり。南越の相呂嘉反を謀るに及び、帝は楊僕等を遣して之を討滅せしめ、西紀前一一尋で東越をも攻下して其民を江淮の間に徙しき。

西南夷

西南夷の經營 西南夷とは今の雲南四川貴州三省の地に分據

せし夷人の總稱にして、就中夜郎滇邛都笮都且蘭冉駹白馬等最も大かりしが、帝は唐蒙司馬相如張騫等を遣して、次第に此地方を經營せしめ、遂に諸夷を滅して其地を七郡となせり。

箕子

朝鮮の征服 朝鮮は殷の太師箕子の始めて周の武王に封せら

衛滿

右渠

四郡

西域諸國

れし國にして、今の黃海道以北の地を領し、子孫相承くること四十一世にして準に至れり。時に秦の末世にして中國大に亂れたりしかば、燕人衛滿亡命して來投し、遂に國を奪ひて衛氏の朝を開けり。然るに孫右渠に至りて漢の武帝の使者を殺し、かば、帝は楊僕荀彘公孫遂等を遣して之を征服せしめ、國を分ちて眞番盛京省の東部及平安道の北部、臨屯江原道及平壤南部、玄菟咸鏡道の四郡となせり。西紀前一〇八年

西域の交通 西域とは匈奴の西に當れる國土の總稱にして、當時は大小數十國に分れたり。その最も著名なる者を歴舉すれば、葱嶺以内には烏孫伊犁にありて強大なり、樓蘭甘肅省の西にあり、車師新疆省吐魯番、龜茲新疆省庫車等の小國ありしが、葱嶺以外には康居イソケル、大宛コイカン、大月氏河水即ちアム川の流域を領す、安息ナル、身毒印度等の諸大國ありて、夙に希臘羅馬の文明を移殖せり。

武帝が此等の諸國と交通を開き、始めて白人の文化を漢土に輸入

大月氏

張騫

滇

霍光

烏桓

呼韓邪
郅支

せしは、實に東洋史上の一大事變なりといふべし。初め月氏は匈奴に逐れて伊犁に走り、更に烏孫に逐れてアムー河谷に出で、河南の大夏バクトを破り、國勢を挽回して大月氏と稱したりしかば、帝は之と結びて共に匈奴を挾撃せんと欲し、張騫を遣して之を説かしめたり。然るに大月氏は當時既に匈奴に報ゆるの意なく、騫は空しく歸國せしが、その西域諸國の國狀を復命するに及び、帝は始めて之に通せんことを計れり。是に於て張騫命を奉つて蜀路より身毒に至らんとせしも、能はずして滇に通じ、後ち匈奴衰弱して北路通ずるに至り、更に烏孫、大宛、康居、大月氏、安息、身毒等の諸國を巡行せり。

第四節 武帝以後の西漢

烏桓の侵寇 武帝崩じて昭帝立ち、霍光遺詔を受けて之が攝政たりしと雖も、外政は頗る縮小して、遂に烏桓を御する能はざるに

至れり。烏桓は蒙古種にして周の東胡の後あり。西漢の始には烏桓山内蒙古の東に據りて匈奴に臣事し、武帝の時には漢に内附して匈奴の偵察をなし、昭帝の世に至りて漸く強盛となり、西は匈奴を侵し、南は漢を犯せり。是に於て匈奴怒りて烏桓を伐たんとせしかば、霍光は匈奴の再び振はんことを恐れ、兵を出して匈奴を斥け、尋で烏桓を征したり。

匈奴の衰弱 是より匈奴は益々漢を恐れて久しく邊境を窺はざりしが、宣帝の時に至りて烏孫を伐ちしかば、帝は援兵を烏孫に遣し、尋で常惠をして大に匈奴を撃破せしめたり。時に匈奴は四面に敵を受けて北に丁零あり、南に西漢あり、東に烏桓あり、西に匈奴あり、國勢日に傾き、屬國皆離反して五單于内に相争へり五世紀前但し久しからずして呼韓邪及郅支の二單于之を分領せしと雖も、呼韓邪は郅支に當る能はず、漢に降りて藩臣と稱し、郅支も亦一旦使を漢に通じたりしが、後康居に走りて甘延

壽郡城の爲に攻殺せられたり。

西域諸國の服屬 匈奴の衰ふるに及び、漢の威令は益々西域諸國

に行はるゝに至れり。昭帝の時、樓蘭匈奴に通せしかば、霍光之を服

して鄯善と改め、後ち宣帝の立つに至り、車師亦反して匈奴に通せ

しかば、鄭吉之を征してその地に屯田し、尋で張奉世は莎車新羅省を

討ち、趙充國は先零青海を平けて金城に屬國を置けり。

是に於て葱嶺以内の諸國は概ね漢に服歸し、鄭吉始めて西域都護

となりて烏壘城に居り、天山の南北三十六國を併せ鎮せり。

王莽の篡立 かく漢の國威は遙に四境に振ひこといへども、元

帝以後は内に宦官と外戚との黨争を生じて國運漸く傾き、帝位は

遂に王莽の篡奪する所となれり。王氏は元帝の時より外戚となり

て漸く勢威を養ひ、成帝の初年には鳳大司馬となり、帝の末年には

其姪莽また大司馬となれり。

鄭吉

西域都護

王氏

莽

西漢の滅亡

制度の急變

莽は英才ありて類に聲望を收め、平帝を擁立して自ら宰衡となりしが、尋で之を弑して孺子嬰を立て、僅に三年にして復之を廢し、遂に自ら帝位に即きて國號を新と改稱せり。時に西紀八年なり。

新の敗亡 王莽位に即くに及び悉く漢の遺制を變せんと欲し、

或は職官の名稱組織を改め、或は州縣の名目境界を改め、或は新に

田制を作り、或は新に税制を設けしかば、内は威信を人民に失ひ、外

は好を匈奴及び西域諸國に失ひ、天下騒然として復漢を思ふに至

れり。

是に於て、赤眉の兵は莒山東省青州に起り、綠林の兵は荊州湖北省荊州府に起り、漢

の宗室劉縝劉秀の二人も亦兵を春陵湖北省襄陽府に起して之に應せり。諸

將乃ち漢の宗室劉玄を立て、諸軍の統一を圖り、秀、縝二人は王尋

及王邑の大軍を昆陽河南省南陽府に破りて、海内の豪傑を響應せしめ、玄は

別將を長安に派遣して王莽を攻殺せしめたり。西紀二三年

新の滅亡

第五節 東漢の初葉

光武皇帝 劉縯は劉玄の忌む所とありて殺されしと雖も、弟秀は巧に難を避け、鄧禹寇恂等を用ゐて河北河内燕趙の地を徇へ、西紀二五年を以て帝位に即けり。之を東漢の光武皇帝と稱するは、その洛陽に都せしを以てなり。是時赤眉の兵は長安に入りて劉玄を逐ひ、公孫述は蜀に據り、隗囂は隴西甘肅に據り、竇融は河西甘肅に據りて各、天下に志を懷さしかば、光武は馮異馬援吳漢岑彭の諸名將を用ゐて、逐次之を平定せしめたり。

匈奴の衰滅 王莽の時匈奴は新の冷遇を怒りて屢南侵せしが、その後凶歳ありて人畜多く死亡し、且つ烏桓の侵撃を受けて國力大に傾き、遂に分れて南北二國となれり。而して南匈奴は北匈奴と隙を生じ、先づ漢に内附して保護を請ひしかば、光武は之に美稷北

群雄の
平定

南北に
分る

南匈奴
内附す

の地を賜ひき、西紀五年既にして北匈奴も亦使を致して和親を求めたりしが、明帝位に即くに及び、耿秉竇固等をして南匈奴及烏桓の兵と共に之を攻めしめたり。尋で章帝の世に至り、北匈奴は益衰耗し、南匈奴は南を攻め、丁零は北を侵し、鮮卑は東に寇し、西域は西に迫りて殆ど自立すること能はざりしが、和帝の即位元年西紀八年竇憲の爲に更に一大打撃を被りき。

竇憲

鮮卑の興起

鮮卑は烏桓と同種にして東胡の後なり。西漢の代には鮮卑山の内蒙古の東部を保有せし小部族に過ぎざりしが、東漢の初より遼東に移りて漢に貢し、匈奴の衰滅するに及びて漸くその故地を蠶食し、檀石槐の出づるに至り、桓帝益兵を四境に用ゐ、悉く匈奴の故地を併せて、勢炎頗る熾なりき。

檀石槐

高句麗の交渉

高句麗は扶餘種にしてもと滿州の地に居りしが、東明王朱蒙の出るに及びて、今の鴨綠江の水域に南下し、始めて

朱蒙

國を建て、高句麗といへり。時に西漢の末葉に當れり。王莽の時より漢に叛きて屢、邊境に寇し、光武の時には一たび使を遣して好を通じたりしが、和帝の時には遼東郡を掠め、安帝の時には穢貊を率ゐて更に遼東、玄菟に寇せり。

光武の對外策

西域の交渉 西域諸國は王莽の時皆叛きて匈奴に屬ししが、光武天下を定むるに至り、復來りて漢の都護を請へり。然るに光武外難を啓くを恐れて之を許さざりしかば、莎車獨り勢を得て傍近數十國を兼併し、車師、鄯善等の十數國は皆好を匈奴に通せり。

班超

然れども光武崩じて明帝嗣立するに及び、竇固等北匈奴を討ちて伊吾盧今哈密に至り、また部下班超をして西域に赴かしめぬ。超命を奉じて先づ鄯善に至り、匈奴の使者を斬りて其王を威服し、尋で干寘和疏勒等喀什の強國を降ししかば、西域諸國皆之に風靡して、再び好を漢に通ずるに至れり。時に竇固等亦車師を討平せしかば、漢

西域の再定 甘英

は都護及戊己の二校尉をその地に置き、之を鎮せしめたり。後章帝の時にいたり、西域復反し、焉耆焉耆龜茲の二國は都護を没し、北匈奴の兵は來りて二校尉を圍みしかば、章帝遂に超を召還して、悉く西域の地を棄てんとせり。然るに超は于寘に止りて兵を請ひ、疏勒、莎車、龜茲等を征して大に威名を立て、遂に西域五十餘國の都護となりて龜茲に駐在し、嘗て甘英を派して大秦近東に使せしめぬ四世紀初年。而して甘英は遂に其志を達せざりしも、尙條支フナケリス、ユーフラテス河の水に至りて還れり。

西域を棄つ

超西域に在ること三十一年にして老を和帝に請ひ、任尙之に代りて都護たりしが、守御其方を得ずして諸國漸く離反し、安帝の時遂に西域都護を罷めて、全く其地を失ふに至れり。四世紀初年

第六節 佛教の東流

人アリア

婆羅門教 四階級

釋迦

佛教の起原 佛教の東流は他日東洋の思想界を一變せる一大事變なり。故に今節を改めてその起原發達を略記すべし。

佛教の本國なる印度はもとドラビド人Dravidianの有なりしが西紀前二千年頃アリア人Arrianの一派中央亞細亞の地より侵入し來り、土民を征服して遂に全くガンガ河の水域を占領せり。

當時アリア人の信せし宗教は即ち婆羅門教にして、既に深遠なる教理を有せり。然れども異族征服の結果として、社會は婆羅門刹諦Shatras利吠舍首陀羅の四階級に分れ、宗教は全く上流社會の專有とされり。是に於て、釋迦は刹諦利族より出で、一新宗教を開けり。所謂佛教是あり。

釋迦は西紀前五世紀の人にして、實名を薩波悉達Sakya Siddhataといへり。父は迦毘羅伐窣都Kapilavastuの君主にして、釋迦はその太子たりしが、夙に人生を悲觀して措くこと能はず。歳二十九にして宮中を脱し、或は

摩伽陀國

阿輪迦王

碩學に就きて道を尋ね、或は深林に籠りて苦行を修し、歳三十五に及びて始めて解脱の法を了り、是より中印度の各地に布教して數千人の門弟を作り、歳八十にして拘尸那拘羅に入滅しき。

阿輪迦王の布教 中印度の摩伽陀國は當時難陀朝の治下ありて、境域最も廣く、且つ多數の佛徒を有したりしが西紀三一五年闔度羅瞿布多Kandakapotaなる者、首陀羅族より出で、王位を奪ふに及び、政治上に於て族制の破るゝと共に、宗教上に於ても亦益、新興の佛教を歓迎することとはなれり。殊に其孫阿輪迦王の立つに至りては、厚く佛教に歸依して頻りに布教の術を講じ、或は堂塔を建て、或は結集を行ひ、又或は法師を國外に派遣して、西は大夏に及び、東は馬來半嶋に至らしめたり。

是に於てか佛教は始めて偉大なる宗教となり、印度及中央亞細亞の諸國に傳播しぬ。其後婆羅門教の再興、回々教の傳來するありし

小乗教

かは、佛教は其本國に於て頗る衰へしも、尙錫蘭嶋に餘勢を留め、是より緬甸暹羅瓜哇等の諸地に流傳せり。但し當時の佛教は所謂小乗教にして、歐人は之に附するに南派佛教の名を以てせり。

大乘教

迦膩色迦王の布教 西漢の代にアムー河上に據りし大月氏は、その後南進してカブールに至り、更に東向して迦濕彌羅に入り、國名を罽賓と稱して四近を奄有せしが、東漢の初世に當りて迦膩色迦王起り、深く佛教を信じて之が興隆を計り、阿輪迦王の古例に效ひて經典の結集、傳教師の派出、堂塔の建立等に力を盡せり。是に於て所謂大乘教なる者興り、明帝の世に至りて始めて漢土に公傳せり。
明帝の迎佛 佛教は西漢の武帝の時より既に密傳せしと雖も、その國教となりて社會に大影響を與へしは、東漢の明帝以後の事なり。明帝嘗て金人を夢みて佛に歸依せんと欲し、蔡愔王導の二人を西域に遣して佛經を求めしめしかば、愔等命を奉じて佛經佛像

蔡愔

白馬寺

及迦葉摩騰竺法蘭の二沙門を得て還れり西紀六十八年。是に於て帝は洛陽に白馬寺を建て、二沙門に命じて經文を摘譯せしめしが、今日存する四十二章經は實に摩騰が翻譯になれり。

馬鳴龍樹

當時罽賓は國運教勢共に彌盛にして、馬鳴龍樹等の諸名僧相繼ぎて輩出せしかば、漢廷は時々西僧を聘して布教を圖らしめ、西紀三世紀の初頃よりは、中國人も亦僧侶たることを許されたり。

第七節 東漢の末葉

宦官外戚を排す

外戚と宦官との消長 西漢の天下は外戚と宦官との紛争によりて衰弊せしが、東漢も亦その覆轍を踏むに至れり。但し西漢にありては、外戚遂に宦官を排擠せしといへども、東漢に於ては之に反せり。即ち鄭衆は和帝を助けて外戚竇氏を除き、孫程は外戚閻氏を斥けて順帝を擁立し、單超は桓帝を助けて梁氏を滅せり。是に於て

宦官は益勢を收めて朝廷に跋扈し遂に所謂黨人と衝突するに至れり。

黨人

黨人
餘人を
殺す

黄巾の
賊

黨人の獄 黨人とは宦官の爲に名けられし悪稱にして、其實は氣節を尙び、宦官の專横を抑へんとせし清流の士なり。桓帝の時、陳蕃、李膺、竇武、杜密等その首領となりて時事を論じ、大學の學生亦之に加はりて朝政を誹議せしかば、宦官は帝に誣奏して其徒二百餘人を獄に下せり。四紀一六六年 桓帝崩じて靈帝繼ぐや、陳蕃、竇武等志を得て朝に列し、勢に乗じて宦官の首領、曹節、王甫等を殺さんことを謀れり。然るに半途にして謀漏しかば、宦官は帝に誣奏して、黨人の重なる者百餘人を殺し、その他隙ある者數百人を處罰せり。

東漢の衰亡 斯の如く朝政日に非なりしかば、鉅鹿の張角之に乗じて先づ亂を作せり。是を黄巾の賊といふ。但し黄巾の賊は幾も

かくして平ぎしと雖も、天下益、動搖して、遂に群雄爭奪の代となれり。

袁紹
董卓

曹操

劉備
孫權
赤壁の
戰

靈帝崩じて皇子辨立つに至り、袁紹は諸將の兵を集めて悉く宦官を誅除せしが、四紀一八九年董卓の入り來りて廢立を行ふに及び、冀州に出奔して關東の諸將を煽動せり。是に於て卓は獻帝を擁して長安に遷りたりしが、久しからずして其臣呂布に弑せられ、呂布又出奔するに及びて、獻帝は洛陽に還れり。

時に曹操は關東にありて勢威最も盛なりしかば、獻帝を許河南に奉じて呂布、袁紹等を破り、尋で烏桓を擊退して將に天下を併吞せんとするの勢を示し、大兵を荊州に出して劉備に迫れり。是に於て備は夏口湖北に走りて、吳の孫權に援を求め、權は周瑜を遣して備と共に大に操を赤壁に破らしめたり。時に西紀二〇八年にして、魏、蜀、吳三國の分立は既に此に基せり。

關羽

漢の滅亡

其後劉備は巴蜀漢中の地を取りて自ら之を守り、關羽を荊州に留めて曹孫二氏の衝に當らしめしかば、孫權は曹操と結びて關羽を攻殺せり。西紀二一九年而して漢室の滅びたるは實に其翌年にありき。

第四章 魏・晉・南北朝時代

第一節 三國

文帝 昭烈帝 大帝

三國の興起 三國の中、魏は曹操の時より既に天下の實權を握りて、魏王に進み、且つ九錫を賜りしと雖も、操は尙世の耳目を憚りて帝と稱せず、子丕に至りて始めて獻帝の禪を受けぬ。魏の文帝即ち是なり。是に於て劉備も亦その翌年を以て蜀帝昭烈帝と稱し、孫權も更に八年を経て吳帝大帝と號せり。かくて魏は洛陽に都して江北十一州後十三州を領し、吳は建業江蘇省に都して江南四州を領し、蜀は成都四川省に都して益梁二州を領せり。

三國の鼎立

陸遜

江水の漲溢

諸葛亮

所謂三國の鼎立是なり。

蜀吳の交戦 蜀の昭烈帝は關羽の仇を復せんとして吳に侵入せしが、攻守六ヶ月にして、遂に吳將陸遜の爲に夷陵湖北省に破られ、僅に遁れて白帝城に入ることを得たり。時に西紀二二二年なり。然るに吳の太祖は却て好を蜀に通じ、吳蜀相應じて魏に當れり。

魏吳の交戦 吳蜀の和成るに及び、魏の文帝は吳の質子を送らざるを怒りて南伐の師を出せり。然れども吳は之を江に拒守し、文帝更に志を得ること能はざりしかば、重ねて大軍を發して之に向ひ、復江水の漲溢に會ふて空しく師を班せり。

蜀魏の交戦 時に蜀は昭烈帝崩じて後皇帝位に嗣き、魏は文帝尋で崩じて明帝之を承けしが、蜀の諸葛亮は先帝の遺命を奉じて自ら北征し、先づ祁山甘肅省を攻めて戦利あらず、次て陳倉陝西省を圍みて糧食盡き、更に祁山を圍みて復糧食に窮せり。是に於て亮は一

司馬懿

且兵を收めて農を勧め、三年を経てまた北征し、且つ吳の太祖を誘ふて共に魏を伐たしめたり。然るに魏の明帝は自ら師に將として吳兵に當り、司馬懿を西に遣して亮を拒がしめしが、亮は懿と五丈原に對峙すること百餘日にして、遂に陣中に病死せり。四紀二 三四年

公孫氏

魏の東征 遼東の地は漢末より公孫度の併する所となり、その子康は高句麗を伐ちて勢漸く強く、孫淵に至りては燕王と稱して、或は吳に通下、或は魏の邊境を侵し、三紀二かば、明帝は司馬懿に命じ、高

東川王

句麗の東川王と力を合せて之を討滅せしめたり。四紀二 三八年かくて遼東は一旦平らぎしと雖も、明帝悉く公孫氏の領土を收め

母丘儉

て帶方樂浪玄菟の三郡に及びしかば、東川王怒りて西安平に寇せり。是に於て魏の幽州の刺史母丘儉は大兵を以て高句麗の都城丸都平安道遼東郡を屠りしかば、東川王は止むなく之を避けて南沃沮に奔

平壤に移る

りしが、魏兵の退くに及び、樂浪帶方の地を略し、平壤に東黃城城を

築きて國都となせり。

司馬懿の統一 魏の司馬懿は軍功を重ねて漸く權威を振ひ、明

昭

帝崩せし後は、自ら丞相となりて國勢を專にせり。懿の子師に至りて始めて廢立を行ひ、師死してその弟昭は晋公に封せられ、重ねて廢立を行ふて益權勢を弄せり。

蜀亡ぶ

時に蜀の姜維妄りに兵を出して魏を侵ししかば、昭は鄧艾鐘會等をして蜀を攻めしめ、遂に成都を陥れて後皇帝を降せり。四紀二 三三年是に

魏亡ぶ

於て昭は晋王に進み、昭の子炎は遂に元帝の位を篡するに至れり。是を晋の武帝と稱す。時に西紀二六五年なり。

吳亡ぶ

其頃吳は太帝の孫皓の治世にして、内は暴政甚しく、外は交趾に反亂ありて國力痛く衰耗せしかば、武帝は杜預王濬等をして之を伐たしめ、直に建業に入りて皓を降し、遂に天下を統一しぬ。時に西紀二八〇年あり。

第二節 兩晋及五胡の紛争

武帝の
封建

八王の亂 晋の武帝は魏の孤立して蚤く亡びたるに鑑み、同族數十人を諸要地に封トて以て帝室の藩屏となせり。是れ他日諸王の跋扈せる所以なり。而して帝は吳を滅してより、漸く淫佚にして國政を顧みず、殊に惠帝の世に至りては、賈皇后暴戻にして諸政を恣にせしかば、趙王倫入り來りて之を殺し、自ら相國となりて廢立を行へり。西紀三〇一年是に於て齊王冏、成都王穎、河間王顥、長沙王乂、東海王越等の諸王交起りて政權を争ひ、戰亂殆ど六年に亘れり。これ即ち八王の亂にして、晋は是より五胡の蹂躪する所となれり。

劉淵

五胡の蜂起

晋の諸王の骨肉相食むに當り、劉淵先づ左國城山西寧夏府に據りて漢王と稱せり。淵は匈奴の後にして、匈奴は嘗て漢の甥たりしを以てなり。時にまた石勒なる者あり、上黨山西潞安府より起り

石勒

李雄
慕容廆
拓跋祿官
姚弋仲

て淵に投せり。勒は羯人にして、羯は即ち匈奴の一部族なり。既にいて氏人氏は匈奴伯李雄は成都に據りて成王と稱し、鮮卑の慕容廆は大棘城盛京省錦州遼に據りて大單于と稱し、同種拓跋祿官は上谷の北に據りて可汗と稱し、尋で羌酋羌は匈奴伯姚弋仲は南安より起りて扶風公といへり。

聰

西晋の滅亡 既にして、劉淵帝と稱して都を平陽に遷し、子聰及

劉曜

西晋の
滅亡

石勒等を遣して晋に寇せしめしかば、晋は東海王越をして之を拒がしめたり。次で淵死して聰位に上り、更に石勒劉曜、王彌等を遣して洛陽を攻陥せしめ、尋で愍帝の長安に即位するに及び、復劉曜をして之を攻陥せしめしかば、西晋茲に亡び、東晋の元帝建業に即位せり。時に西紀三一七年あり。

趙の興亡

漢は劉聰の死後、劉曜位を承けて長安に都し、國號を改めて趙といへり。即ち前趙是なり。然るに石勒、曜と隙を生トて別

前趙

後趙

石虎

に後趙を立て、一八三襄國直隸省順德府に據りて頻に前趙を侵して遂に全く之を滅して獨り威を北方に振ひしかば、氏王蒲洪羌酋姚弋仲等皆之に降るに至れり。然れども勒死して子虎の立つに至り、都を鄴河南に移し北は慕容皝を伐ちて大敗し、南は東晋を侵して志を得ず、西は涼王張駿を征してまた敗績せしかば、國勢大に傾きて挽回するに由なく、虎の死するに及んで遂に冉閔の爲に篡奪せられたり。四三三

苻秦の興起

是に於てか蒲洪は姓を苻と改めて自ら三秦王と稱したりしが、子健に至り長安に入りて帝と稱し、國を秦といへり。時に慕容氏は龍城に都して燕王と稱し、拓跋氏は雲中に入りて代王と稱し、涼は依然として河西の地を奄有せしが、健死して子堅の嗣ぐや、四三三秦は益、強くして遂に燕涼代の三國を滅せり。

肥水の役

是より先き、東晋は桓温を將として頻に中原の恢復

代燕

苻健

桓温

謝安

苻堅

肥水の役

を圖り、西は漢李壽自立せしより成を改めて漢と云へりを滅し、北は趙秦燕の三國を伐ちて、國勢漸く振ひ、温の死せし後は、謝安相となりてまたその遺謀を繼ぎ、姪謝玄を擧げて荆揚の地を守らしめたり。然るに秦の苻堅は此時既に江北を統一せしを以て、遂に東晋と雌雄を決せんと欲し、戎卒六十萬騎兵二十七萬を率ゐて南征せしが、不幸にして晋將謝石、謝玄等の爲に大に肥水安徽省鳳陽府に破られ、四三三狼狽して長安に還れり。

第三節 鮮卑の全勝

後魏の興起

是に於て苻秦の勢威は俄に地に落ちて、江北は麻の如く亂れ、西秦乞伏後燕慕容西燕慕容後秦苻後涼呂等の諸國續々として興起せしかば、鮮卑の拓跋珪も亦代の舊地を恢復して代王と稱し、尋で國號を改めて魏と號し、遂に都を平城に定めて帝と稱せ

拓跋珪

り。西紀三九八年後魏の道武帝即ち是なり。

東晋の滅亡 東晋は肥水の役後、氣漸く驕りて内政紊亂せしかば、孫恩之に乗トて亂を作し、桓玄尋で帝位を篡せり。時に彭城に劉裕ある者あり、先づ孫恩を討ちて武名を著し、次に桓玄を誅して車騎將軍に進み、更に南燕及後秦を滅して宋王に封せられ、遂に恭帝の禪を受けて帝位に上れり。是を宋の武帝と稱す。時に西紀四二〇年にして、晋は太祖武帝より此に至るまで、凡そ十五世百五十六年にして亡べり。

東晋の滅亡

江北の統一 是より先き、後魏の始めて帝號を稱するや、江北に

は南燕慕容北涼沮渠南涼秃髮西涼李大夏赫連北燕馮等の諸國新に興

柔然

吐谷渾

五國

りて互に攻伐を事とし、且つ北方には柔然拓跋ありて蒙古の地方を併せ、西方には吐谷渾慕容廆の後ありて氏羌を併吞せしが、宋の興るに及びては、塞内の諸小國概ね皆滅亡して、僅に後魏、大夏、西秦、北

燕、北涼の五國を剩せるのみ。

太武帝

既にして後魏に太武帝出で、その兵益強くして頻に大夏を破りしかば、大夏は西に遁れて西秦を滅し、更に北涼を取らんとして吐谷渾に滅され、其地は擧げて魏の有となれり。而して太武帝は其後彌兵を用ゐて、北燕、北涼の二國を滅し、且つ吐谷渾及柔然を撃退せしかば、北方は全く魏の治下に歸して、天下は南北二朝とかれり。時に西紀四三九年なり。

清談の流行

魏晋の際に於ける清談の流行は、善く思想界の大

佛老の學起る

清談に假托す

勢を反照せるものあり。兩漢の代は實に儒學全盛の時代にして、學者皆經書の註釋に力を盡したりしが、漢末に至りて佛老の學起り、遂に玄妙虚空なる清談の基を開けり。且つ三國以後は中原全く修羅場と化して、處世の術最も困難なりしかば、人皆名を清談に托して一世を夢送し、以て一身の安全を保てり。魏の王弼、何晏、阮籍、嵇康

及び晋の山濤王戎王衍樂廣等は其最も著明なる者なりき。

儒佛の東流 海東には此頃高句麗百濟新羅の三國ありて相鼎

峙せり。初め西漢の代に當り、高句麗の南方即ち今の朝鮮の南部に

は、馬韓辰韓辨韓の三韓ありて數多の小國に分れたりしが、魏の頃

に至りて馬韓の伯濟より百濟を生じ、辰韓の斯羅より新羅を生じ、

各、傍近の邦國を併吞して威を海東に振へり。而して晋の代に至り

ては、二國共に中國と交通を開き、且つ我神功皇后は新羅を征して、

任那の官家を確立せしめ給ひしかば、儒學及佛教は忽ち東流して

我日本に至れり。

儒學の流傳は史に明文なきを以て詳に難しと雖も、高句麗は最

も早く中國の文學を傳へしもの如く、西紀三七二年を以て實に

大學を創立しき、百濟も此頃より漸く記録の法を傳へ、尋ぞ阿直岐

王仁等を我邦に遣して、論語及千字文を應神帝に獻せしめたり。

三韓
百濟
新羅

阿直岐
王仁

佛教も亦西紀三七二年を以て始めて苻秦より高句麗に傳へ、後十
二年を経て東晋より別に百濟に傳へたりしが、高句麗は更に之を
新羅に傳へ、百濟の聖王明は之を我欽明帝に獻せり。

聖王明

第四節 南北朝

宋魏の交戦 宋は武帝崩つて文帝立つに至り、國勢稍振ひて優

に後魏と對峙するを得しかば、魏の柔然を伐つに方り、王玄謨を遣

して魏に侵入し、碯礮を取りて滑臺を圍ましめたり。然るに魏の太

武帝は柔然を破りて後、大舉して南征し、宋の江北六州を蹂躪し、揚

子江上に至りて還れり西紀四五〇年

是より宋は大に衰へしが明帝に至り、再び兵を魏に交へて復大敗

しぬ。時に蕭道成なる者あり、屢戰功を立て、相國齊公に進み、遂に

順帝の禪を受けたり。是を齊の太祖高皇帝といふ。時に西紀四七九

蕭道成
宋を篡

太武帝
の南征

年なり。

孝文帝

魏齊の交戦

其頃魏には孝文帝位に在り、類に中國の文化を慕ひ、都を洛陽に移し、國姓を元と改め、政事文學より風俗習慣に至るまで、悉く胡風を變つて國勢日に盛なりしが、齊は之に反して明帝弑虐を行ひて自立せしかば、孝文帝は其罪を鳴して齊を伐てり。然れども帝は遂に志を達せずして師を還し、尋で齊は明帝死して國內大に亂れ、梁王蕭衍遂に和帝に迫りて位を譲らしめたり。是を梁の武帝といふ。時に西紀五〇二年なり。

蕭衍齊を篡す

後魏の分裂

是より先き魏は孝文帝崩つて、宣武帝位を継ぎしが、帝崩つて孝明帝立つに至り、胡太后事を用ゐて紀綱大に紊れ、孝莊帝立つに及びて復爾朱榮の反亂を生ぜり。時に高歡兵を起して爾朱氏を討平し、孝武帝を立て、自ら晋陽に居りしと雖も、尋で帝と隙を生つて兵を洛陽に出せり。是に於て孝武帝は長安に出奔し

爾朱榮高歡

宇文泰

て關西の大都督宇文泰に依り、是を西魏といふ、歡は別に孝靜帝を洛陽に立て、後鄴に移れり。是を東魏といふ、時に西紀五三五年あり。

梁の衰亡

侯景

梁は後魏の内亂ありしが爲に久しく北顧の患を絶ちたりしが、武帝の末年に至りて侯景の大亂を生つき。初め景は東魏より梁に降りて河南王に封せられしが、武帝の東魏を伐ちて復之と和するに至り、疑懼して遂に兵を起し、建康を陥れて簡文帝を擁立したり。次で侯景帝を弑して自立するに及び、皇弟湘東王繹は王僧辨、陳霸先の兩將を遣し、之を討平せしめて自ら位に即けり。是を元帝と云ふ。時に武陵王紀も亦立ちて元帝と位を争ひしかば、西魏は之に乗つて蜀を取り、尋で元帝を擒にして岳陽王詵を江陵に立てたり。是を後梁の宣帝といふ。

後梁

陳霸先梁を篡す

是に於てか王僧辨、陳霸先の二人相計りて敬帝を立てしが、尋で霸先は僧辨を殺して帝位を篡せり。是を陳の武帝と稱す。時に西紀五

五十七年なり。

齊

南北の統一 是より先き、東魏は高歡の子洋、帝位を篡じて齊齊北

と稱し、尋て宇文泰の子覺は西魏を篡じて周周北と稱したりしが、周

周齊を
滅す

は其後突厥北匈奴族及陳と通じて齊を侵し、遂に全く之を滅して北朝

を一統せり。時に西紀五七七年なり。かくて周は陳と相對峙するを

楊堅周
を篡す

數年なりしが、其間外戚楊堅勢威を積みて相國隋王となり、遂に周

室を篡じて、隋の高祖文帝となれり。時に西紀五八一年なり。

文帝位に即きて南北を統一せんと欲し、先づ突厥を伐ちて北顧の

突厥を
伐つ
後梁を
廢し陳
を滅す

患を除き、次で後梁を廢して其地を合せ、更に兵を出して陳を滅せ

しかば、東晋以來の分裂始めて一に歸せり。時に西紀五八九年にこ

て、我崇峻帝の二年に當れり。

第五章 隋唐時代

第一節 隋

文帝の勤儉 文帝天下を統一して意を内治に用ゐ、親ら勤儉を

戶口増
殖

行ふて下民を愛撫せしかば、人民皆積年の衰弊を脱して戶口大に

増殖し、府庫亦餘裕を生じて他日煬帝の豪華を來すに至れり。

煬帝の奢靡及外征 煬帝文帝を弑して帝位に上り、故の太子勇

及弟漢王諒を殺して、天下また憚る所なきに至り、始めて奢侈に耽

りて宮室苑囿を各所に造り、珍禽嘉木を四方に求め、且つ通濟渠、永

運河を
作る

濟渠等の諸運河を鑿して南北巡遊の便に供し、毎歲鉅萬の工夫を

役し、また鉅萬の金を費せり。

時に隋の國威は四境に振ひ、東突厥此時突厥は分れては國初より之に

服事し、日本も小野妹子を遣して親交を修めたりしが、帝は尙漢武

四方を
征す

の跡を慕ふて屢、遠征の師を出し、西は吐谷渾を破り、南は林邑安南の

民力消耗

を定め、東南は琉求今之琉球を伐ち、東北は高麗を征せり。然れども、高麗の役は前後三回にして其間四年に且り、糧食を費し士卒を失ひしこと殆ど數へ難かりしかば、民力全く消耗して群盜各地に蜂起せり。

群雄の割據

隋の滅亡 林士弘は江南江蘇に據りて楚帝と稱し、竇建徳は漳南山東に據りて長樂王と稱し、李密は河南河南に據りて魏公を稱し、

劉武周突厥は馬邑山西に據りて定陽可汗と稱し、梁師都是朔方トオル

に據りて梁帝と稱し、李軌は河西甘肅に據りて涼王と稱し、蕭銑は

江陵湖北に據りて梁王と稱せり。

李淵

世民

時に唐公李淵は詔を奉つて突厥を討ちしが、戦利あらずして罪を得んことを恐れ、その子世民と共に兵を太原山西に起りて突厥の援を借り、直に長安に進みて恭帝を立て、煬帝時に江都に居り尋でその禪を承けて帝位に上れり。是を唐の高祖神堯皇帝といふ。時に西紀六一

八年なり。

第二節 唐の創業及外征

秦王世民 高祖位に即きて世民を秦王に封じ、之に兵馬の全權を委ねて群雄の討平を謀らしめたり。

時に煬帝は尙江都にありて北歸の心なかりしかば、其臣宇文化及

之を弑して自ら許帝を稱し、東都の留守王世充も亦其主越王侗を

廢して自ら鄭帝といへり、而して李密は此時既に王世充に破られ

て唐に降りしと雖も竇建徳は尋で許を滅して夏帝と稱し、沈法興

吐陵に據る李子通江都の二人も亦新に起りて帝王の號を稱へたりしが、

世民諸將を督して是等の諸國を討じ、數年にして涼定陽鄭夏梁の

五國を滅せしかば、其他は皆刃を向へずして亡び、惟り梁師都尙殘

存せしと雖も、西紀六八八年に至りて遂に平定せられたり。

群雄の平定

世民建
成を殺す

貞觀の治初め高祖の長子建成太子たりしが、弟世民の功を忌むに至りて世民之を殺し、遂に自ら太子となりて高祖の禪を受けたり。是を太宗皇帝といふ。

太宗の
内治

太宗位に即くに及び杜如晦・房玄齡・魏徵・王珪等の諸名臣を用ゐ、天下を十道關内・河南・河東・河北・山南・關右・淮南・江南・劍南・嶺南に分ちて府兵の制を定め、京鄙に學校を興して諸種の學術を獎勵し、且つ奢靡を戒めて徭賦を軽くせしめ、海内昇平にして路遺すを拾はざるに至れり。是を貞觀の治と稱す。貞觀は太宗治世の年號なり。

突厥の
分裂

突厥の討平突厥は南北朝の頃に大に興り、其末年には東西二國に分れ、東突厥は隋に服事し、西突厥は烏孫の故地を領せり。然るに隋末に至りて、東突厥に始畢可汗出で、東は室韋・契丹を併せ、西は高昌・吐谷渾を服し、竇建德・劉武周・梁師都・李淵等の諸雄皆之に臣禮を執れり。

頡利
突利

始畢の後二世にして頡利可汗に至り、姪突利可汗と共に兵を率ゐて幽州に寇し、後また大舉して京郊に迫れり。既にして突利は頡利と隙を生じて唐に朝し、薛延陀一部族は回紇同上と共に叛きて頡利を破りしかば、太宗乃ち李世勣・李靖等を遣して重ねて之を擊破せしめ、頡利を生擒してその降衆を幽州・靈州の間に置けり。

李世勣
李靖

西突厥

侯君集
薛定方

西突厥も射匱可汗及其の弟統葉護可汗の出るに當り、悉く西域諸國を覇有して、北は鐵勒に至り、南は罽賓・波斯に及びたりしが、其後太宗の世に至りて、内訌の爲に分れて東西二國となれり。是に於て太宗は侯君集・高侃の二人を出して之を伐たしめ、高宗は更に蘇定方を遣して沙鉢羅可汗を擒にせしめ、悉く其地を收めて濛池・崑陵の二都護府を置けり。

諸夷族の降服 初め太宗の突厥を討破するに當り、奚・室韋・高昌・吐蕃・康國・林邑等の諸國は皆唐の威を恐れて入貢せしが、吐谷渾・薛

段志玄

安西都護府
燕然都護府

延陀の二國は尙其強を頼みて邊に寇し、尋て吐蕃は松州に寇し、高昌は西域の貢路を塞ぎしかば、帝は段志玄をして吐谷渾を征せしめ、侯君集をして吐蕃高昌を討たしめ、又李世勣をして薛延陀を伐たしめたり。四紀六是に於て、党項、伊吾、回紇等も皆唐に來貢し、帝は高昌の地土魯番に安西都護府を置き、回紇の南オアルトスに燕然都護府を置きて、是等の諸國を治めしめたり。

太宗の東征

百濟及高麗の討滅 初め新羅は獨り唐と善くして遙に使聘を通たりしが、百濟は新羅と宿怨ありて屢、その邊城を侵し、遂に高麗と力を協せて之を伐たんとせしかば、新羅は使を遣して急を唐に報トき、是に於て太宗は之が調和を計りしが、高麗敢て命を奉せざりしかば、大に怒りて東征の師を興し、親ら遼東に赴き、白巖城を降し、安市城を圍みて還れり。蓋し天寒くして糧食將に盡さんとせしが故なり。

百濟の滅亡

日唐の衝突

高麗の滅亡

安東都護府

高宗の時百濟更に高麗及靺鞨と力を協せて新羅の北境を侵略せしかば、新羅は再び急を唐に報じて其援を請へり。是に於て高宗は蘇定方を遣して新羅と共に百濟を伐たしめ、遂に其都城此を陥れて、國王義慈を降せり。時に西紀六六〇年なり。既にして鬼室福信興復を圖り、王子豐璋を日本に迎へ、且つ救を齊明帝に請ひしかば、帝は太子と共に舟師を卒るて筑紫に幸し、帝崩するに及んで、阿曇比羅夫等太子の命を奉トて趣き救ひしと雖も、我軍利あらず、豐璋高麗に奔りて事全く水泡に歸せり。次で高麗の權臣蓋蘇文卒し、その二子不和にして國大に亂れしかば、高宗は李勣を遣して新羅の兵と共に平壤を攻陥せしめ、國王寶藏を降して全く高麗を滅せり。時に西紀六六八年なり。かくて海東の地は舉げて唐の威令を奉ずるに至りしかば、高宗は安東都護府を平壤に置きて之を總管せしめたり。

舊唐州
八百

唐の隆盛 唐初の外征は概右の如くなりしかば、國威の及ぶ所東は日本海に達し、西は興都克士山に跨り、南は林邑を盡し、北は骨利幹エニヒイヌクに至り、玄宗の時代には羈縻州の數殆ど八百に達せりといふ。羈縻州とは即ち中國十道以外の州にして、當時安東初め平壤といふ。安北燕然都護府の改稱にして、漠南を治せり、單于高宗の置きし所に於て、北庭新羅省にありて、安西龜茲即ち今の庫車にありて、安南東京の河内にありての六都護府の統轄せし所なり。

第三節 唐の中世

武氏の
立身

武後の革命 太宗崩つて高宗位を継ぎ、太宗の才人武氏を容れて昭義となし、武氏性明敏にして大に帝に寵せられ、遂に皇后となりて國政に參與せり。高宗崩するに及びて武後は先づ中宗を立てしが、僅に二月にして

周

張東之

之を廢し、その弟旦後立ちて善を立て、自ら朝政を掌りて祖考を追王し、殆ど唐の宗室を夷滅して帝位に上り、國號を改めて周といへり。時に西紀六九〇年なり。武氏はかくして唐の國祚を傾けしと雖も、裡に權數ありて能く人材を擧用せしかば、將相多くは其任に適ひて國政爲に紊亂せざるを得たり。然れども女主の弱點として嬖幸多く、殊に晩年に至りては張易之張昌宗の二人大に權を弄せしかば、宰相張東之宮中に入りて之を斬り、武氏を上陽宮に遷して中宗を復位せしめたり。時に西紀七〇五年なり。章氏の難 初め中宗の廢せらるゝや、皇后章氏帝に配所に從ひて共に艱厄を嘗めしを以て、帝の位に復するや、また共に朝に臨めり。既にして章后は武三思と通つて張東之等を退け、且つ安樂公主三思の子に適と謀りて帝を弑し、溫王重茂を立て、自ら政を攝せしかば、

隆基

臨淄王隆基兵を起して后及公主を斬り、温王を廢して睿宗を立て、尋でその禪を受けて帝位に上れり。玄宗皇帝即ち是あり。

開元の治

安史の亂 玄宗位に即きて勵精治_を圖り、姚崇宋璟の二名相また

相次ぎて輔佐の任に當りしかば、帝の初世は實に唐運極盛の時代となれり。然るに其後帝は漸く驕奢の念を生じて國事を顧みず、姦臣之に乗じて朝政を紊じしかば、遂に安史の大亂を生ずるに至れり。安史とは安祿山父子と史思明父子とをいふあり。

安祿山

安祿山はもと營州の雜胡_突なりしが、才勇人に勝れて、深く帝の信任を受け、營州の都督より進みて平盧范陽の兩節度使に兼任し、尋で東平郡王となりて、河北道の採訪處置使をも兼ねるに至れり。是に於て祿山は漸く唐を輕視して窃に異志を畜へ、先づ請ふて悉く部下の漢將を罷め、次に大兵を卒ゐて馬三千匹を獻せんことを奏せしかば、帝は始めて祿山を疑ひて其獻を止めしめたり。<sub>西紀七
五五年</sub>

史思明

是歲冬祿山反旗を范陽に翻し、所部の兵及奚契丹の兵凡十五萬を卒ゐて東京_洛を陷れ、自ら號して大燕皇帝といへり。顏真卿顏杲卿郭子儀李光弼等各義兵を擧げて之を禦ぎしと雖も、賊將史思明數官軍を撃退して遂に潼關に入りしかば、帝は蜀に出奔して太子に位を譲り_{是を肅宗}使を回紇に遣して援を請へり。

慶緒

既にして回紇の援兵來り、官軍漸く勢を得て長安及洛陽を恢復せしが、偶祿山は子慶緒に殺され、慶緒も亦尋で思明に殺されて賊勢大に沮み、思明は范陽に引退せり。因て肅宗は李光弼を遣して之を伐たしめたりしが、幾もなくして思明は子朝義に殺され、朝義も亦部下李懷仙に殺され、懷仙出で降るに及びて八年の戰亂全く平定に歸せり。

朝義

回紇 回紇は鐵勒の一部にして隋には韋紇といへり。隋末より漸く興りて突厥及薛延陀の地を略し、玄宗の時に至りて全く突厥の

汗懷仁可

餘類を滅し、悉く東突厥の故地を奄有して國勢大に振ひたりしかば、玄宗其主を冊して懷仁可汗となせり。既にして安史の亂起り、唐は止むを得ずして其援を乞ひしかば、亂後或は金帛を贈り、或は和蕃公主を與へて其恩に報せり。然れども回紇は猶之に甘せずして往々邊に寇したりしが、文宗の時に至りて黠戛斯に擊破せられ、餘類磧西に奔りて尙回鶻といへり。

長安に侵入すに

吐蕃 吐蕃は圖伯特種にして漢の西南夷の後なり。西紀六三四年始めて唐に貢し、後吐谷渾党項等を破りて唐の松州に侵入せしかば、太宗は侯君集を遣して之を討平せしめたり。然れども其後吐蕃は益強くして、西方一帯の地を併せ、高宗の代屢唐の征討軍を破り、殊に代宗の即位元年西紀七〇三年には長安に侵入して帝を陝州に奔らしめぬ。尋で郭子儀の兵を率ゐて來援するに會し、長安を去りしと雖も、其侵寇は依然として甚しく、或は回紇を率ゐる、或は高昌を誘ふ

て來れり。

大祚榮

渤海 渤海の國祖は靺鞨の粟末部より起れり。高麗の亡ぶるに當りて乞々仲象なる者あり、一旦唐に屬して營州に徙りしが、尋で叛きて太白山の東北に奔り、子大祚榮に至り、大に武后の兵を破りて震國王と自稱し、遂に玄宗の封を受けて渤海郡王となれり。其地東は海を窮め、西は遼水を踰え、南は大同江に及び、北は松花江に至れり。

日渤の交通

祚榮死して子武藝立ち、始めて使を遣して日本に通せり。時に西紀七二八年にして聖武帝の神龜五年に當れり。是に於て帝も亦使を遣して之に報じ、兩國の交親これより漸く進み、渤海の國使は常に我北陸出羽の海岸に來着せり。

海東の最盛國

武藝の後、欽茂、穆敬、玄錫等出でて、國力益振ひ、國內に五京上京龍泉府、東京龍原府、中京顯德府、南京府、海府、西京鴨綠府十五府を立て、唐の世を終るまでは海東の最盛國な

りしが、五代の時に至り、契丹の太祖阿保機の爲に滅されたり。

第四節 唐の末世

藩鎮の跋扈 高宗始めて幽州節度使を置き、玄宗之に次ぎて十節度使安西、北庭、河東、朔方、河東、范陽、平盧、隴右、劍南、嶺南を邊塞に設け、土地財賦甲兵の三權を掌らしめしかば、勢漸く強大にして遂に國家の大患をなせり。殊に安史の亂後は河南、河北、山南、江淮の諸道にも悉く節度使を置きたりしが、諸鎮多くは其職を世襲して純然たる列侯と化し、或は姦將之を奪ひて後任命を朝廷に強請し、朝廷また軟弱にして之を拒むる能はざりしかば、諸鎮の跋扈は愈甚しく、或は帝王の號を稱し、或は貢賦を納めざるに至れり。

然るに憲宗帝の其患を斷たんと欲し、杜黃裳の議を用ゐて西川劍南鎮海鎮の二鎮を討滅せしより、諸鎮稍朝命に遵ふに至れり。

世襲

憲宗

宦官帝を弑す

文宗

宦官の專恣 唐の宦官は玄宗の時より漸く事を用ゐ、徳宗の代には遂に軍國の大事に參與するに至れり。是に於て宦官は全く内廷の主權を握りて恣に天子を廢立し、憲宗、敬宗の二帝は實に宦官の弑する所となれり。

文宗は宦官の爲に立てられしと雖も、尙其專恣を怒り、宋申錫、李訓、鄭注等と共に之を誅せんことを謀りたりしが、謀遂に成らずして宦者の勢威は益甚しく、以後歴代の諸帝皆之に當る能はず、朱全忠の起るに及び、始めて之を誅夷するを得たり。

李牛の黨争 李牛の黨争とは穆宗以後數十年に亘れる李牛二氏政權の争奪にして、藩鎮及び宦官の二大患と相俟ちて唐の衰頽を來しし者なり。

李德裕
李宗閔

穆宗の時李德裕翰林學士たりしが、中書舍人李宗閔が嘗て其父吉甫を譏切せしを含み、之を構貶して劍州の刺史となせり。是れ實に

牛僧孺

黨争の始にして、二人は是より各其黨與を率ゐて互に排軋し、殊に文宗以後宗閔は牛僧孺を引きて其黨となし、相位を争奪すること數回に及べり。但し武宗の時には徳裕再び大勢力を得て朝政を專にせしと雖も、宣宗立つに至りて之を斥け、三人共に外に死するに及びて朝臣の黨争全く止めり。

黃巢

唐の滅亡 宣宗の代紀綱一時振ひたりしが、崩後盜賊各地に起り、僖宗の時黃巢反して東都を陥れ、尋で西都安に入りて大齊皇帝といへり。四紀八是に於て帝は蜀に出奔して沙陀四突厥より李克用を召し、其力によりて漸く之を平定することを得しが、是れ他日李克用の大に興れる所以なり。

朱全忠

時に黃巢の降將に朱全忠初め温なる者あり、克用と合はずして互に敵視せしが、同平章事崔胤の之を召して共に宦官を滅さんとするに當り、直に應じて悉く宦官を誅夷し、功を以て梁王に進めり。四紀九〇

唐の滅亡

三なり。既にして全忠は篡奪の志を懷き、密に胤を殺して帝に東遷を請へり。是に於て鳳翔の節度使李茂貞檄を四方に傳へて之に抗せしかば、全忠は人をして帝を弑せしめて哀帝を立て、尋でその禪を受け、帝位に上れり。是を梁の太祖といふ。時に西紀九〇七年なり。

第五節 學術宗教

韓退之

詩文の發達 唐の學術中最も注意すべきを詩文の發達とす。文章は魏晉以後纖巧華靡なる駢儷文のみ盛なりしが、唐の徳宗の時に至り韓退之の出で、力を古文の恢復に用ゐ、専ら達意の文を作り、柳宗元また之に和して時流の駢儷文を排せしかば、唐の散文は是より全く其趣を變じて、再び周漢醇朴の古體に復せり。

柳宗元

詞賦は漢初より既に行れしと雖も、未だ高遠なる思想を之に寄す

杜甫李白
白居易

る作者なく、殊に漢末よりは漸々纖弱に陥りて見るに足るもの多からざりしが、唐の玄宗の時に至りて杜甫李白の二大家起り、積衰を挽回して、前古未聞の盛運を開き、尋で白居易出で、更に一世の牛耳を執れり。

玄奘

佛教の盛運 佛教は南北朝以來益盛にして、印度との宗教上の交通も開けたりしが、唐代玄奘義浄の印度に赴きて經典を求め、殊に玄奘の有名なる新譯千三百餘卷を作りしより、佛教は更に一段の勢力を得、玄宗の時には寺數四萬を越え、僧尼の數七十餘萬に達せり。是を以て我日本の如きも、遙に其盛運を慕ふて留學僧を派遣し、一には諸派の佛教を傳受し、一には諸種の文明を輸入せしめたり。是れ當時日唐の交通頻繁なりし所以なり。但し唐の佛教も武宗の時に至りて大厄難に遭遇し、寺院四萬、僧尼二十七萬を失ひ、爾後遂に唐初の盛運を恢復すること能はざるに至れり。

日唐交通の

方士

道教の發達 道教は秦漢の頃より、方士の徒の老莊の説に附會して作りしものなり。後漢の時に張陵張角あり、東晋の始に葛洪あり、後魏の始に寇謙之ありて、各神仙の術を講じたりしが、猶未だ佛教に抗する能はざりき。

老子を廟祀す

然るに唐に至りては國姓李にして老子と同姓なりしかば、方士等之に乗じ、老子を以て唐の遠祖なりとせり。是に於て唐は高祖の時より既に老子を廟祀したりしが、玄宗は頗る道教を重じてその布教に盡力し、武宗は悉く他教を排して道教を唯一の國教となせり。後來道教の佛教と相並びて、東洋史上に大影響を有するに至りしは實に此に基けり。

亞細亞の全盛

西域諸教の流傳 西紀七八九の三世紀は實に亞細亞全盛の時代なり、亞拉比亞人は西亞にありて西洋文明の中心となり、唐は東亞にありて東洋文明の中心となれり。而して陸上及海上の交通は

景教

盛に其間に行れ、西域諸國の諸宗教、即ち景回、祆、摩尼の四教は他の文明と共に漸次東流して、遂に中國に達せり。左に其一班を説かん。景教はキリストリウスの開きし基督教の一派にして、盛に波斯に行れたりしが、其僧阿羅本アロ本は太宗の貞觀十年即ち西紀六三六年を以て長安に來りぬ。太宗乃ち之を賓迎してその布教を許し、高宗、玄宗の二帝亦之を獎勵せしかば、景教は漸く社會の上下に流行するに至れり。徳宗の世に建てられたる大秦景教流行中國碑を以て知る可し。

回教

回教はモハメドの開きしものにして、サラセン帝國の勃興と共に一時は西亞全體に蔓延し、徳宗の時を以て始めて唐に入り、重に廣東地方に行れたり。蓋し亞拉比亞の商賈の海上より之を傳へたるが爲なり。

祆教

祆教はマクトリアのゾロアスターが開きし宗教にして、火を崇拜

摩尼教

す。極めて古くより葱嶺以東に傳り、南北朝の頃より中國に達し、唐の太宗は爲に長安に波斯寺を建てたり。摩尼教は波斯のマニが開きし教にして、祆教と基督教とを折衷せしものなり。此教のサマルカンドを経て始めて支那に入りしは何時頃なるや知り難しと雖も、唐の玄宗の嘗て之を禁せしことあるを以て見れば、是より先き既に中國に入りしなるべし。但し回紇人間には盛に行れしも、中國人は遂に之に化せられざりしが如し。

第六章 五代及兩宋時代

第一節 五代

梁初の諸雄

後梁 太祖唐を篡して汴京を帝都となすに當り、李克用は晋陽にありて晋王と稱し、李茂貞は鳳翔甘肅府にありて岐王と稱し、楊行密は淮南にありて吳王と稱し、王建は成都にありて蜀王と稱し、執

れも唐の年號を用ゐて梁の使命を拒めり。此他閩王王審知閩州にの如き、吳越王錢鏐越州にの如き、楚王馬殷潭州にの如き、南漢王劉隱南漢州にの如き、名は梁の治下にありと雖も、其實は皆純然たる列國の觀を呈せり。

李存勗

かくて晋は連年兵を出して梁と雌雄を争ひしが、克用の子存勗に至り武威愈盛にして悉く北方の地を併せ、國號を唐と改め、且つ既に帝莊と稱して遂に南伐の大師を發せり。時に梁は末帝位にありて連戰利を失ひ、大梁梁の東都府陷るに及び人をして已を殺さしめたり。時に西紀九二三年にして、我醍醐帝の延長元年に當れり。

梁の滅亡

後唐 唐の莊宗は梁を滅して先づ大梁に都し、尋で洛陽に遷りぬ。時に岐王茂貞は使を遣して入貢し、蜀王衍は淫酒にして國大に亂れたりしかば、莊宗は兵を出して之を討滅せり。是に於て帝は漸く驕恣にして國政大に紊れたりしが、明帝篡立するに及びて唐威四

明帝

石敬瑭

唐の滅亡

方に振ひ、海内爲に小康を得たり。

帝崩して閔帝立ち、廢帝從珂更に閔帝を逐ひて自立する至り、河東の節度使石敬瑭と合はせして、將に之を天雄に移さんとせしかば、敬瑭遂に契丹の兵を借り來りて洛陽を陷れ、全く唐を滅して帝位に上れり。是を晋の高祖皇帝といふ。四紀九三六年

阿保機

契丹の興起

契丹は東胡の裔にして鮮卑の故地に興り、後魏の頃より自ら契丹といへり。後梁の末に當りて其主に阿保機起り、性豪雄にして侵略を好み、東は渤海を滅して東丹となし、西は奚を破りて悉く突厥の故地を併せ都を臨潢今の西刺木倫河の右岸にありに定めて天皇王といへり。遼の太祖即ち是なり。四紀九一六年

契丹と後晋との關係

太祖死して子太宗嗣ぐや、後晋の高祖を援けて後唐を滅したるを以て、後晋は其報として幽薊檀雲等の十六州直隸に直隸を獻じ又每歲帛三十萬匹を送りて臣屬の禮を取れり。

出帝

後晋 かく高祖敬瑭は偏に契丹に恭順を表したりしが、高祖崩じて、出帝立つに至り、契丹に屈事するを潔とせずして、僅に其孫と稱せしかば、契丹の太宗は怒りて晋に寇せり。是に於て出帝は親ら兵に將として契丹と戦ひ、一たび敵軍を撃退してより復意を北邊に注がざりしかば、太宗は之に乗じて再び南伐の大師を興し、直に大梁を陥れて出帝を生擒せり。四紀九 四六年

亡晋の滅

遼

太宗は其翌年を以て大梁に來り、國號を遼と改めて將に中國に君臨せんとしたりしが、胡騎剽掠を恣にして深く士民の憤怨を買ひ、遂に望を斷ちて北に歸り、遂に死して世祖嗣けり。

劉知遠

後漢 時に河東の節度使に劉知遠といへる者あり。もと沙陀の人にして晋の高祖に任用せられ、出帝と合はずして敢て其急を救はざりしが、晋の亡ぶるに及び、晋陽に在りて帝と稱し、契丹の北歸するに乗じて都を大梁に移しき。是を漢の高祖皇帝といふ。

郭威

高祖崩じて隱帝即位するに及び、李守貞は河中に、王景崇は鳳翔に、又趙思綰は長安に據り、各叛旗を翻しき。是を三叛といふ。加之、孟知祥は唐の時より成都に據りて後蜀を立て、李冕は晋の時より吳に代りて南唐を興し、且つ閩を滅して威を江南に振ひたりしが、今や共に兵を出して三叛の應援をなせり。是に於て帝は郭威を遣して漸く之を平定せしめしが、亂平ぐに及び、威を疎じて鄴都の留守となし、尋で人をして之を殺さしめんとせり。因て威は其冤を訴へんとし、兵を率ゐて大梁に向ひたりしが、帝は之を拒ぎて亂兵の爲に弑せられ、威遂に將士に推されて帝位に上れり。是を周の太祖皇帝といふ時に西紀九五一年なり。

亡漢の滅

劉崇

後周 太祖漢に代りて周を建つるに當り、隱帝の叔父劉崇は晋陽に據りて北漢と稱し、南唐は楚を滅して湖南十一州を取れり。而して北漢は深く後周を仇とし、援を遼に求めて屢之を伐ちしも戰常

世宗

に利あらず、太祖崩じて世宗嗣立するや、劉崇は好機措くべしとて、遼將楊克と共の大舉して南侵せしが、世宗の爲に大に高平に破られ、却て晋陽を圍まるゝに至れり。

世宗の經營

世宗聰明英武にして中原の統一に志あり、西は後蜀を伐ちて秦鳳の地を復し、南は南唐を征して江北の諸州を收め、北は遼を討じて五橋關以南を平けたりしが、更に進みて幽州に赴かんとするに當り、會、疾を獲て大梁に還り、尋て崩じ、子恭帝位を嗣けり。

趙匡胤

時に宿將に趙匡胤なる者あり、大に將士の心を收めたりしが、遼兵の來侵あるに際して將士の擁立する所とあり、遂に恭帝の禪を受けて帝位に即けり。是を宋の太祖皇帝といふ。時に西紀九六〇年にして、我村上帝の天德四年に當れり。

周の滅亡

第二節 宋の創業及遼夏の入寇

太祖の内治

太祖周に代りて帝位に登るに當り、先づ意を内治に用ゐて主權の強固を謀れり。宰相趙普能く帝旨を奉じ、唐季以來國家の大患たりし藩鎮の權を奪ふを以て急務となし、一方には武臣の節度を罷めて文臣を以て之に替へ、一方には諸州に通判及轉運使の二官を設けて民軍財の三權を朝廷に收めたりしかば、是より藩鎮の權漸く輕くして、朝威各地に行るゝに至れり。又五代の際より宿衛橫暴の弊ありしかば、帝は諸州の饒勇を選みて禁旅に補し、禁旅を出して邊城を守らしめ、常に相交代せしめて將士專横の基を絶ちき。

趙普

藩鎮

宿衛

太祖の外征

かくて太祖は漸く國礎を鞏固ならしめしと雖も、未だ宋の正朔を奉せざるものには北に北漢あり、西に後蜀あり、南に荆南湖南南唐南漢吳越等ありしが、太祖は逐次兵を出して是等の諸國を削平せしめたり、但し帝の兵を用ゆるや頗る謹慎を旨

太祖の用兵

太宗
とし、招きて至りし者は皆禮して之を存せり。殊に北漢の如きは遼の後援ありて其兵強かりしかば、帝は無益の師を損するを恐れて之を存し、太宗の立つに及んで漸く其主繼元を降し、始めて海内を統一するを得たり。

景宗
宋遼の衝突 遼は初め宋と好を通じたりしが、太宗の北漢を滅して將に幽薊の地を取らんとするに及び、遼の景宗は耶律休哥を遣して、大に宋軍を高梁河に破らしめたり。是に於て宋遼の親交全

く破れ、南北連年兵を交へて涿、朔、深、德等の諸州を争へり。

眞宗
既にして遼は景宗崩して聖宗立ち、宋は太宗崩じて眞宗立ちしが、聖宗遂に大舉して親ら南侵し、破竹の勢を以て澶州東京の東北に迫れり。

寇準
眞宗仍て群臣を召して方略を問ひしに、王欽若等は江南に幸するの議を獻じ、寇準は之を排して堅く帝の親征を請ひしが、帝遂に寇

準の策を納れ、北伐して澶州の北城に入れり。是に於て宋軍は勇躍

して萬歳を呼び、遼兵は之を聽きて氣大に沮みしかば、聖宗乃ち使を遣して和を通じ、眞宗亦之に應じて曹利用を遣し、宋は毎歳銀十萬兩絹二十萬匹を遼に贈り、宋を兄とし、遼を弟とするの約を結ばしめたり。是を澶淵の盟といふ。四紀一〇

西夏の興起 眞宗崩じて仁宗立つに至り、西夏西邊に起りて更に宋の一勁敵となれり。西夏の先は党項西伯特種の拓跋氏なりしが、赤

辭の時より唐に歸して姓を李と賜り、世夏州ハルに居りて平夏部と號せり。後數世を経て繼捧に至り、始めて宋に朝して銀、夏綏宥の

四州を獻じ、太宗の命を以て彰德の節度使となれり。然るに族弟繼遷は之に反してまづ遼に降り、遼の聖宗の封を受けて夏王と稱し、

既にして又宋に歸して姓名を趙保吉と賜り、眞宗の時は定難の節度使となれり。是を西夏の太祖を稱す。太祖崩じて子德明嗣ぎ、西平

府州に據りてまた遼宋の間に反服し、始めて兩國の封を受けて西

澶淵の盟

繼遷

德明

元昊

平王といへり。後諡して太宗と稱す。既にして宋の仁宗の時に至り、太宗崩じて子元昊立ちしが性雄毅にして侵略を好み、先づ回鶻の地を併せて自ら大夏皇帝と號し、三〇四一〇更に鋒を東に轉じて宋の西邊に寇せり。西夏の景宗即ち是なり。

宋夏の衝突 西夏の景宗は賀蘭山の東麓に據りて阿爾金山以

范仲淹
韓琦

東の地を併せ、頻に東進の策を講せしかば、宋の仁宗はその官爵を削奪し、先づ知陞州夏竦、知延州范雍等をして守備をなさしめ、尋で范仲淹、韓琦の二人をして之を援けしめたり。然るに景宗は之に屈せずして、或は南侵して韓琦を破り、或は東侵して麟州附近を蹂躪せしかば、仁宗乃ち秦鳳陜原環慶鄜延を分ちて四路となし、各経略安撫招討使を置きて之を拒がしめたり。

是より宋夏の争抗數年に亘り、兩國共に兵事に困弊せしが、仁宗は景宗の和意あるを聞き、試に使を遣して之を招かしめしに、景宗果

宋夏の
媾和

して使を遣して和を請へり。是に於て仁宗は景宗を夏國王に封じ、且つ歳幣銀二萬兩、絹二萬匹、茶三萬斤及黄金帶を賜ふて、兩國の境界を確定せり。慶曆四年即ち四〇四四年

第三節 朋黨の紛争

呂夷簡

慶曆の黨議 仁宗の初世は劉太后政を攝したりしが、後太后崩じて帝政を親らするに至り、呂夷簡相となりて郭后を廢し、且つ范仲淹、歐陽修、余靖等を構貶せり。蓋し皆廢后の事を難せしを以てなり。

夏竦

杜衍
石介

既にして帝は讒誣の行るゝを察し、言路を開きて諫官の員を増し、歐陽修を知諫院となし、韓琦、范仲淹を樞密副使となし、且つ夏竦を舉げて樞密使となさんとせり。然るに諫官異議を唱へて、竦に代ふるに杜衍を以てし、國子直講石介また詩を作りて竦を大姦に擬せ

歐陽修

しかば、竦大に怒りて其黨と共に論を作り、衍等を目して黨人となせり。是に於て歐陽修は朋黨論を作りて之を辨せしと雖も、其實は即ち一種の黨争にして、兩黨の辨難排擠は是より益劇烈となれり。是を慶曆の黨議といふ。

王安石

王安石の新法 仁宗崩じて英宗立ちしも、幾もなくして神宗ま

青苗の法

た之に代るや、王安石參知政事となりて三司の條例司を置き、呂惠卿と謀りて所謂新法を施行せり。新法には青苗均輸保甲市易等幾多の條例ありしと雖も、就中青苗の法は毎春錢を人民に貸付し、秋熟の時に利息と共に之を收むるものにして、弊害の件ふこと最も甚しかりしかば、蘇轍まづ其不可を痛論しき。然れども王安石は敢て憚る所なく諸新法を實行し、苟も之を議する者あれば皆其官を奪へり。是に於てか蘇轍韓琦范純仁呂公著等の諸名士は皆罷められ、
安石韓絳呂惠卿の三人専ら志を朝に得るに至れり。

安石の失政

元祐の更化及紹聖の紹述 安石相たること前後二回にして、

司馬光

意の如く新法を行ふを得しと雖も、内は法令繁雜にして民其堵に安せず、外は遼夏二國を謀らんとして、北は遼に數十里の地を與へ、西は新に吐蕃と隙を開けり。然れども神宗の世を終るまでは、其黨與尙帝の信任を失はずして朝政に與りたりしが、神宗崩じて哲宗立つに至り、高太后政を攝して新法を廢し、悉く安石の黨與を斥けて、司馬光呂公著文彦博等を用るたり。是を元祐號年の更化といふ。然るに司馬光は相たること僅に八閱月にして卒し、朝臣是より洛

章淳

程頤を獨首、蘇軾を首、劉摯を首の三黨に分裂して、互に相軋轢せしかば、安石の黨與は皆其機の近けるを祝せり。元祐八年高太后崩じて、哲宗政を親らするに至り、章淳呂惠卿蔡京蔡卞等再び朝に列して神宗の諸法を復し、呂大防范純仁劉摯蘇軾蘇轍程頤等を貶竄して、司馬光呂光著等の謚號を追奪せり。是を紹聖號年の紹述といふ。

韓忠彦

蔡京の全勝 哲宗崩じて徽宗嗣ぐや、向太后政を攝り、韓忠彦曾布范純仁等を舉用して、章惇蔡京蔡卞等を貶竄せしが、既にして太后崩ずるに及び、帝は紹述の政に意あり、而して忠彦はまた布と隙を生せしかば、蔡京之に乗じて入つて相位に進み、頻に新法を復して悉く反對黨を斥け、元祐の姦黨を端禮門外に標し、熙豐神宗の時の功臣を顯謨閣に圖せり。

蔡京の専恣

かくて蔡京は天下の全權を一手に集め、或は土木を興して府庫を空しからしめ、或は官職を濫授して子弟親族を朝に滿たしめ、群臣時に其非を言ふと雖も、尙朝廷に出入すること前後二十年に亘り、其子攸も亦大に帝に寵せられて、權勢父を凌ぐに至れり。

第四節 遼金の興廢

金の勃興 金は即女眞にして、靺鞨の黒水部より起れり。其地は

女眞

完顔部

阿骨打

今の滿州松花江の水域にして、唐の初には黒水府に屬し、渤海の興起に際しては大氏の有となれり。然るに五代に至り、契丹大に興りて遂に渤海を滅せしかば、松花江以南は契丹に屬して、熟女眞と稱し、以北は其藉に入らずして生女眞といへり。生女眞は風俗殊に素朴にして、人民鷙悍なりしが、其一部なる完顔部は宋に至りて漸く強大となり、其主烏古廼は遼の眞宗の命を以て生女眞の節度使となれり。烏古廼死して、子烏雅束嗣ぎ、烏雅束死して弟阿骨打嗣ぎしが、阿骨打は沈毅にして大略を懷き、遼の天祚帝が貪縱にして、屢名鷹を女眞に求むるを怒り、遂に之に叛きて寧江州を取り、更に進みて黃龍府盛京省開原縣を陥れ、自ら帝位に上りて國を金と號せり。金の太祖即ち是なり。時に西紀一一一五年なり。

童貫

趙良嗣

金宋の同盟 宋の童貫既に吐蕃に勝ちしより更に遼を謀らんと欲し、趙良嗣の策によりて女眞と共に之を挾撃するの議を建て

しかば、徽宗乃ち使を金に遣して其意を通せしめたり、是に於て金の太祖は大に喜びて返使を宋に送り、遂に挾撃の議を定め、金は遼の中京直隸省平泉州を取り、宋はその南京直隸省北京府を取り、事若し成らば宋は薊景等の十七州を收め、従來遼に贈りし歳幣を金に輸せんことを約せり。

遼の滅亡 既にして金は遼を撃ちて其上京遼東府及中京を陥れ、天

祚帝の西京山西大同府に逃るゝに及びて、また之を降したりしかば、宋も

亦童貫に命じ、兵十五萬を率ゐて遼の南京に向はしめたり。時に南

京には耶律大石ありて天錫帝を奉せしが故なり。然るに宋兵常に

遼軍に破られて、南京に進むこと能はざりしかば、金主は宋の出兵

の期を失ひたるを責め、且つ前約を渝へて南京及薊景檀順涿易の

六州のみを宋に與へんといへり。是に於て宋は趙良嗣を遣して之

を争はしめしむ。金人許さず、而して童貫自ら功成らずして遂に罪

耶律大石

を得んことを恐れ、密に使を金に遣して、約の如く南京を挾撃せんことを求めしかば、金軍乃ち三道より進み來りて直に之を攻陥せり。

時に遼の天祚帝は遁れて雲内に在り、將に西夏に投じて其保護を

請はんとせしかば、金は西夏に地を食はしめて、遼夏の關係を斷た

しめたり。因て、帝は党項に投せんと欲して北に走りしむ。應州に至

りて遂に金兵の獲る所となりき。時に西紀一一二五年なり。

かく遼は一旦亡びしと雖も、耶律大石は其衆を率ゐて土耳其斯坦

に奔り、吹河上の虎思斡耳朶に都を定め、西遼を建てて、濶兒汗と稱

せり。西遼の德宗即ち是れなり。

西遼

金宋の衝突 金は遼を滅するに及びて更に前約を食み、燕京遼の

の租錢百萬緡を宋に徴して、且つ其金帛子女を掠め去りしかば、

宋金の間は是より日に非にして、邊將の反服は遂に兩國の争端と

燕京を
取る

天祚帝
捕はる

なれり。

時に金は太祖既に崩じて太宗位を嗣ぎしが、之を好機として、直に兵を出し、宗望をして燕京に向はしめ、宗翰をして太原に向はしめたり。是に於て徽宗は内禪して欽宗を立て、使を金軍に遣して和を請はしめしめ、金將之を顧みず、進みて汴京を圍めり。李綱諸將を督して之を禦ぎ、且つ頻に主戦説を主張せしと雖も、李邦彦相位に在りて媾和の利を欽宗に奏せしかば、帝はその言を納れて和を金に求め、張邦昌と肅王樞とを質とし、中山河間太原の三鎮を割譲し、且つ犒師金二十餘萬兩銀四百餘萬兩を出して、漸く金人を退かしむるを得たり。

李綱

宋の媾和

北宋の滅亡 然れども兩國共に之を以て永遠の和議となさず、宋は三鎮に詔して堅く金に備へしめ、且つ遼の遺族に書を送りて叛を謀らしめしかば、金兵再び來侵して京城を陥れ、張邦昌を立て

二帝を擒にす

楚帝となし、欽宗帝及徽宗上皇を捕へて北に還れり。時に西紀一二七七年にして、我崇徳帝の大治元年に當れり。

宋室の南渡 北宋全く亡び、汴京悉く金兵の荒す所となりしが、

高宗

欽宗の弟康王構は尙兵を率ゐて濟州にありしかば、張邦昌は孟太后と圖りて之を應天府河南府に迎立せり。南宋の高宗即ち是なり。帝立ちて李綱を相とし、一時強硬の政策を執りしと雖も、既にして黃潜善綱に代りて和を主とせしかば、帝は先づ北方に意を斷ちて揚州に幸し、尋で金人の來侵に逢ふて、江南の各地に轉遷し、遂に臨安浙江省杭州府に到りて之を南宋の國都となせり。

臨安

秦檜の和議 かく南宋は既に落日の觀ありしも、岳飛張浚韓世

劉豫

忠等の諸名將ありて、尙能く金軍を禦ぎしかば、金は宗翰宗輔宗弼等を遣して頻にその地を蠶食せしめ、且つ宋の降將劉豫を汴京に立て、齊帝となし、之に關中の地を與へて以て宋に當らしめたり。

秦檜

廣帝亮

和金の
和息

南北の
休息

宋金の
交戦

是に於て秦檜は全力を盡して媾和を謀り、李綱、張浚、韓世忠等の主戦説を排し、且つ岳飛を殺して遂に和議を調へ、宋は歲幣銀絹各二十五萬を納れ、金は徽宗の梓宮と韋太后とを還し、且つ淮水と大散關とを以て兩國の境界となすことを約せり。四一紀一

世宗と孝宗 時に金は太宗既に崩じて熙宗位を嗣ぎしが、叔父宗幹の子亮之を弑して自ら帝位に上るに及び、是を廢帝頻に南侵の策を畫して南京を汴に移し、遂に大舉して江岸に迫れり。然れども宋兵能く拒ぎて江を渡らしめず、尋て亮は軍中に弑せられて、世宗代り立ち、和意を宋に通じき。

既にして宋の高宗も亦位を孝宗に譲りぬ。孝宗先づ北伐の師を出して利あらず、遂に金の侵地を還して和議を講じ、歲幣銀絹各十萬を減じ、金を叔とし宋を姪とする事を約せり。四一紀一 六五年 金宋多年の紛争は是より全く其跡を絶ち、南北共に休息を得しこ

と三十餘年に亘れり。蓋し孝宗は尙北方の經營に意ありしと雖も、世宗賢明にして之に加ふること能はざりしが故なり。

韓侂胄の專横 孝宗崩じて光宗立ち、光宗尋て疾ありて韓侂胄寧宗を擁立せしが、侂胄遂に其功を恃みて驕恣を極め、苟も其意に逆ふ者あれば皆之を貶逐せり。

時に金の北には蒙古新に興り、金の章宗は其防禦に苦みしかば、侂胄之に乗じて北伐の大師を出せり。然れども諸軍皆利あらずして金兵蜀漢荆襄兩淮の諸郡を陥れしかば、帝は止むなく侂胄を殺して其首を金に送り、歲幣の銀絹を増して三十萬とし、金宋叔姪の關係を改めて伯姪の關係とせり。時に西紀一二〇七年なり。

第五節 蒙古の勃興

成吉思汗の興起 是時に當りて漠北の蒙古部を一統せし者あ

鐵木真

也速該

り。名を鉄木真と稱し、號を成吉思汗といへり。蒙古部は唐の室韋の後にして幹難河と克魯倫河との間に住し、幾多の部落に分れて貢を遼金に奉せり。鉄木真の父也速該に代るや、歲僅に十三、家臣多く叛き去りて具に辛酸を嘗めたりしが、長ずるに及びて漸く威名を收め、遂に蒙古の諸部落を併せて幹難河上に即位し、群臣の尊號を受けて成吉思汗といへり。時に西紀一二〇六年にして、蒙古は是より東洋史上の一大勢力となれり。

乃蠻

西夏を
伐つ
金を伐
つ

成吉思汗の南侵 是に於て成吉思汗は益、四境を併吞せんと欲し、東は塔々兒を服し、西は乃蠻を平け、悉く漠北の諸部族を従へて遂に其鋒を南方に轉じ、先づ西夏を伐ちて更に金に向へり。時に金は永濟の治世にして、西北諸州は既に叛きて蒙古に降りしかば、成吉思汗は先づ其四子と共に大軍を率ゐて東北の諸州を蹂躪せり。既にして金人は永濟を殺して宣宗を立てしが、成吉思汗更

に大兵を出して其西京大同府及北京大定府を陥れ、且つ中都大興府を圍みしかば、宣宗乃ち和を蒙古に請へり。是に於て成吉思汗は一旦兵を引去りしと雖も、後宣宗の都を南京開封府に遷すに至り、大に怒りて中都を攻陥し、悉く眞定正定府以北の地を略取せり。

西遼の興亡

西遼丹黑契丹は德宗即ち耶律大石の時、合兒剌回鶻康

花刺子
摸

里、結憂斯等の諸族を屬して、殆ど中亞細亞の全地を有し、西は花刺子摸を降し、西南は波斯の塞爾受克朝を破りたりしが、其後數十年にして國運漸く傾き、花刺子摸は之に乗じて西方の地を奪へり。

屈出律

成吉思汗の乃蠻を伐ちて之を滅すや、乃蠻王の子屈出律敗奔して西遼に投じ、花刺子摸王と謀を通じて遂に西遼の王位を奪へり。是に於て成吉思汗は哲伯等を遣して更に之を伐たしめ、屈出律を擒殺して悉く西遼の故地を領せり。

哲伯

ムハメ
ド

成吉思汗の西征 當時花刺子摸の按里檀をムハメドと云ひ、其

扎刺丁

二將南
露に入

西夏を
滅す

領有東北は垂河に至り、西南は波斯灣に至り、東南は印度河に及び西北は裏海の西南端に及び、成吉思汗の花刺子摸と交通を開かんと欲して使者を送るや、花刺子摸人は之を殺して敢て答へざりしかば、成吉思汗は遂に赤察合台、窩濶台、拖雷の四子及哲伯速不台の二將と共に大兵を督して之に向ひ、殆ど其全國を蹂躪して赤土となし、ムハメドを裏海の一小島に逐ひ、其子扎刺丁を印度のデルヒに逐ふて還れり。時に西紀一二二三年なり。而して哲伯速不台の二將はムハメドを追窮して後更に南露に向ひ、欽察、阿羅思、露西亞、不里阿耳等の諸國を破りて還れり。

金夏の再征 成吉思汗の西征より還るや更に中國を平定せんと欲し、まづ兵を西夏に加へて其西部を略し、尋で之を全滅して其主李睨を蒙古に送り、二七年尋で金を伐ちて六盤山に至りしが、病を獲て遂に崩じき、後諡して太祖と稱す。太祖に四子ありて皆戰功

四子の
分領

太宗

金の挾
撃

を建て、父の遺命によりて、歐亞の征地を分領せり、即ち長子求赤は吉利吉斯、荒原以西を領し、次子察合台は西遼の故地を領し、三子窩濶台は乃蠻の故地を領し、四子拖雷は蒙古の本土を領せり。

金の滅亡 太祖崩じて太宗窩濶台蒙古の大汗となり、太祖の遺志を繼ぎて金の討滅を謀り、先づ謀を以て潼關を破り、遂に拖雷と共に進みて金の南京を圍みしかば、金は止むなく質を納れて和議を請へり。是に於て太宗は一旦金と和を結びて其兵を收めたりしが、既にして金人の蒙古の使者を殺すに會し、大に怒りて再び兵を出し、且つ宋の理宗と共に之を挾撃せんことを約せり。時に金の哀宗は南京の糧盡きたるを以て蔡州に奔りしが、蒙古兵の西北より宋兵の東南より來り圍むに及び、遂に城中に自盡しぬ。時に西紀一二四三年なり。

拔都の西征 太宗既に金を滅して更に西征の大師を興し、求赤

の子拔都をして、海都貴由蒙哥速不台等と共に歐洲に向はしめたり。

ルーリ朝

其頃露西亞はルーリ朝既にノヴゴロドに據りて露西亞皇帝の名を有せしと雖も、國內四分五裂して未だ統一に歸せざりしかば、蒙古兵は容易に之を蹂躪することを得たり。即ち速不台は先鋒として不里阿耳に向ひ、蒙哥は之に次ぎて欽察に當り、拔都は最後に中堅に向ひてモスクワを陥れ、ノヴゴロドを略し、遂にキエフを降して全く露土を平定せり。

露國を定む 海都

露國平定するに及び、拔都は更に兵を分ちて西征の途に上り、海都をして北軍に將として波蘭に入らしめ、自ら南軍を督して匈牙利に向へり。斯くて北軍はクラカウを取りてシレシヤに進み、獨逸及波蘭の聯合軍をワールスタットの野に破りてリーグニツに至り、南軍は匈牙利の大軍をサヨ河に破りてベストブダの二府を陥れ、且

ワールスタット

サヨ河

つ別隊を出してセルビア・ダルマチア地方を蹂躪せしめたり。偶、太宗崩じて、訃音軍中に達せしかば、拔都は乃ち兵を收めて諸將を國に歸へし、自ら南露に留りて金黨國を立てたり。時に西紀一四三三年なり。

金黨國

憲宗

旭烈兀の西征 太宗の崩後蒙古は一時帝位を空しふし、皇后朝に臨みて制を稱せり。既にして貴由の太宗子立ちて定宗となりしが、在位僅に三年にして崩じ、皇后復朝に臨みて政を聽けり。是を以て蒙古は人心相統一せざること前後十年に亘り、英氣痛く損じて敢て力を外に伸すこと能はざりしが、憲宗蒙哥の拖子の立つに至りて再び外征の大師を出せり。

ウクウ 羅斯 ンスタム

當時波斯はイスマイル派の教主ロクウヂンの治下にありて、勢威遠近に振ひ、八吉打は尙哈里發回教の有に歸して、モスタシム之に治せしが、旭烈兀憲宗弟は先づクヒスタンを陥れてロクウヂンを降

と次に八吉打を屠りて回教國を滅し五八紀一二更にシリヤに侵入して埃及兵を破り、アレキサンダー及的迷失吉を取れり。

偶憲宗の計至りて旭烈兀は一旦軍を班したりしが、既にしてシリヤの留守の埃及兵に破らるゝありしかば、直に其援に赴きて埃及兵を退け、且つ悉く小亞細亞地方を討平して、都をタプリーズに定め、所謂伊蘭國と建て、之を子孫に傳へたり。

伊蘭國 趙范

憲宗の南征 初め金の亡ぶるに當り、宋將趙范等は頻に北方を恢復せんと欲し、遂に大兵を擁して汴京に至り、更に勢に乗じて洛陽を取りしかば、蒙古の太宗は使を遣して之を責めしめ、且つその子潤端を將として淮漢の地方を侵さしめたり。

既にして太宗崩じ、蒙古は一時外征の餘力なかりしかども、定宗を経て憲宗の立つに至り、國威再び振ひて意を中國の經營に用ゐ、太弟忽必烈を關中河南に封じて、まづ大理及吐蕃を降さしめ、遂に共

忽必烈 大理

鄂州

に師を督して西方より宋に向ひ、忽必烈は深く進みて鄂州湖北省武昌府を圍み、帝は蜀を略し、釣魚山に至りて崩せり。

賈似道

時に宋の賈似道は理宗の命を奉じて鄂州の援に赴きたりしが、憲宗の崩せしを聞きて密に和を忽必烈に求め、宋は蒙古の臣となりて歲幣を納れんことを請へり。是に於て忽必烈は其請を納れて鄂州の圍を解き、國に歸りて帝位に即けり。是を世祖と稱す。四紀一二 六〇年

似道の專恣

南宋の滅亡 鄂州の圍解くるや、似道は其實を秘して己の功となし、大に理宗の寵任を受けて權を朝廷に振ひたりしが、蒙古は其間を以て益南侵の備をなしき。

伯顔

理宗崩じて度宗位に即くに至り、蒙古は遂に兵を出して襄陽湖北府を攻陥し、尋で國號を元と改め、更に伯顔を將として大兵を以て臨安に迫らしめたり。是に於てか度宗の子恭宗は陳宜中の奏に従ひて似道を貶殺し、且つ使を元軍に遣して和を求めしめしかば、伯顔

恭宗捕はる

陸秀夫
張世傑

文天祥

乃ち臨安に入りて帝及謝全二宮を捕へ、元の上都燕京に送りて帝を瀛國公となせり。四組一二七六年
時に皇兄益王昞及皇弟廣王昀の二人は共に遁れて温州にありしかば、陳宜中、陸秀夫、張世傑等相會して是を福州に立てたり。是を端宗皇帝といふ。
次で文天祥の義兵を擧げて來り會するありしかば、宋軍稍勢を得て、専ら四近の恢復に従事せり。然るに幾もなくして、元將阿剌罕來りて福州を攻陥せしかば、帝は宜中等と海に航して廣州に奔り、其後各地に轉遷して遂に碭州に崩せり。因て秀夫は世傑と共に皇弟昀を立て、崖山に遷りたりしが、元將張弘範の來攻益甚しくして之を支ふること能はず。天祥は外にありて擒にせられ、帝は秀夫と共に海に投じ、世傑は安南に赴かんとして海上に溺死せり。時に西紀一二七九年なり。

佛老の
刺激

周敦頤

程頤
程顥
張載

朱熹

宋の理學 宋は武力に於ては漢唐に比すべくもあらず、殊に南宋は僅に淮漢以南の一弱國に過ぎざりしが、思想界に於ては漢唐を凌駕して、儒學史上に一新時期を畫せり。蓋し魏晉以來佛老の學漸く盛なりしを以て、學者其刺激を受け、漢唐訓詁の學に甘ずる能はずして、遂に所謂理學なるものを開きしなり。
宋の理學を分ちて四大派となす、即ち濂溪の周敦頤、洛陽の程頤、程顥、關中の張載、閩中の朱熹是なり。周敦頤は實に理學の開祖にして、其學は道家に出で、大極圖說及通書を著して易理の蘊奧を究めたり。程頤程顥は兄弟にして、其學を敦頤に受け、頤は定性書を著し、頤は易傳を作れり。張載は二程と同時代の人にして、易と中庸とを尙ひ、正蒙理窟、東銘、西銘等の著あり。朱熹は南宋の人にして字を元晦と云ひ、宋の理學を大成して孟子以後の大儒と稱せられ、易本義詩集傳、四書集註、近思錄、通鑑綱目等を著して、永く儒學家の模範とな

れり。此他尙北宋には胡瑗邵雍あり、南宋には陸九淵ありて各一家をなせり。

第七章 元明時代

第一節 元の盛世

王建

後高麗の從順 海東の地は、唐の時百濟高麗の二國共に亡びて、新羅獨り南方に雄視し、渤海尋て其北に興りて悉く唐の領土を蠶食せしが、五代の時に至り、新羅は後高麗の太祖王建の爲に滅され、渤海は契丹の太祖阿保機の爲に滅されたり。

高麗と蒙古

其後契丹は國を遼と號して、屢中國に入寇せしが、高麗は之に反ち、後晋の時より中國の正朔を奉じ、宋遼金の三國に歷事し、蒙古の起るに及びては、更に其援を請ふて之に歲貢を納め、今の咸鏡平安二道の地は概ね蒙古の有に歸しき。

北條時宗

文永の元寇

日元の衝突 世祖忽必烈の時、蒙古は國號を元と改め、國勢日に

振ひて高麗は益恭順なりしが、日本は其東に在りて尙使聘を通せざりしかば、世祖は高麗王元宗を介して之を招致せしめたり。時に日本は龜山帝の御宇にして、北條時宗三たび其使を斥けしかば、世祖乃ち東寇の師を興し、高麗の兵八千と共に日本を伐たしめたり。是を文永の元寇と稱す。然れども其兵暴風に遇ひて空しく敗歸せしかば、世祖は再征を期して征東行中書省を高麗に設け、元宗を以て其左丞相となせり。

范文虎

元宗崩じて忠烈王立つに至り、世祖は其爵を進めて駙馬高麗王となし、再び杜世忠等を遣して日本を諭さしめたり。然るに北條時宗文永の來寇を怒りて、之を鎌倉に斬りしかば、世祖乃ち十有餘萬の大兵を發し、左丞相范文虎をして、高麗の援軍一萬と共に我筑肥二國の沿岸に寇せしめたり。然れども日本は上下心を一にして能く

弘安の
元寇の
交趾

之を禦ぎ、暴風復俄に起りて船艦覆没せしかば、元は十萬の師を失ひ、高麗は七千の兵を損じて事全く水泡に歸せり。時に西紀一二八一年にして、國史に弘安の元寇といへるもの即ち是なり。

安南及占城の征討 古昔安南は交趾南交の二部に分れ、周の時

眞臘

占城
大越

より中國に朝し、秦漢吳晉宋齊梁陳隋唐十朝の間は全く中國の領有なりしが、五代の時に至り、吳權始めて自立して中國の治を離れ、丁部領之に繼ぎて宋の太祖より交趾郡王に封せられたり。時に交趾の南方に位せる扶南及林邑にも、各獨立の國王ありて、扶南は眞臘と稱し、林邑は占城と稱したりしが、李氏交趾に起りて大越國を建つるに至り、一〇紀一〇年眞臘占城の二國を討滅して之を占臘といへり。

安南を
征す

李氏國を有つて三百餘年にして亡び、陳氏王位を得るに至り、蒙古は之を征して其貢を收めたりしが、世祖の時に及びて二國の和ま

陳日燁

占城を
征す

た破れ、帝は托歡等を遣して屢之を伐たしめ、遂に國王陳日燁の媾和を許して安南の師を罷めたり。時に占臘は再び其舊に復して、扶南占城の二國となりしかば、世祖は、峻都阿答海等を遣して占城を伐たしめ、安南行省をして之を統御せしめたり。

緬甸、
暹羅

緬甸の征服 緬甸は漢に掸國と稱し、唐に驃國と號し、宋に至りて始めて緬國といへり。甸は即ち其部族の名なり。元の世祖使を遣して其内屬を諭さしめしが、國王敢て命を奉せざりしかば、帝は意を決して大兵を出し、三たび之を征して遂に國都を陥れ、國王の降を納れて之を緬甸國王に封せり。

元の版圖

是より先き世祖は兵を出して瓜哇をも攻め下せしを以て其領土は殆ど東亞の全地を奄ひ、國運の隆盛實に其極に達せり。但し察合台國は久しからずして離反せしといへども、伊蘭國

元の極
盛

は西亞に鎮して世々元の威命を奉じ、欽察國は東歐に鎮して白人の東進を遮断せり。

第二節 元の衰亡

海山

海都汗の離反 海都は合失の子にして太宗の孫なり、世祖即位の際和林の留守阿里不花と共に反旗を翻し、戦利あらずして乃蠻の故地に引退し、自ら蒙古の大汗と稱して、世祖の命を拒み、察合台國の八刺汗及欽察國の忙哥汗と結びて頻に本國の蠶食を謀り、殊に八刺の死後は、海都自ら察合台汗を任命して之と共に今の回疆に侵入し、將に進みて和林に迫らんとせしかば、世祖は海山に命じて之を撃退せしめたり。然れども海都は毫も屈する色なく、或は東蒙古の諸汗と共に元を挾撃せんことを謀り、或は獨り大兵を擁して和林に向ひしと雖も、

阿里不花

察八兒

毎に海山の爲に撃破せられて志を達する能はず、尋で海都死して其子察八兒立つに至り、降を成宗世祖孫に請ひ、數十年來の紛争始めて解けたり。

宗族の離反

海都の亂後宗族の結合大に破れて、朝政漸く萎微に赴き、察合台欽察の二汗國もまた元の下風に立たざるに至れり。

鐵木迭兒

權臣の跋扈 成宗崩じて姪武宗立ち、武宗尋で崩じて弟仁宗位を嗣けり。仁宗の時丞相鐵木迭兒は太子碩德八刺を擁立して専恣貪虐を極め、諸臣の彈劾に逢ふて一旦相位を失ひしと雖も、碩德八刺の帝位に上るに及び、宗英また右丞相に拜し再び權を弄して中外の怨望する所となれり。是に於て帝は拜住に任じて鐵木迭兒を疎外せしかば、其黨鐵失先づ拜住を殺して遂に帝を弑し、晋王也孫鐵木兒を北邊に迎へ立て、泰定帝となせり。四紀一三 二四年泰定帝立ちて鐵失等を誅し、上都開平府に幸して燕帖木兒を京師

鐵失

燕帖木兒

に留めたりしが、帝崩じて天順帝繼ぐに至り、燕帖木兒は武宗の子
圖帖睦爾を奉じ、上都を攻陥して天順帝の璽を奪へり。時に圖帖睦
爾の兄和世球は漠北に在りて帝位に即きしかば、明燕帖木兒は之
を迎へて暴に崩せしめ、遂に圖帖睦爾を立て、文宗と名し、獨り亟
相となりて朝政を專にせり。

伯顔

のち寧宗を経て順宗に至り、燕帖木兒死して伯顔之に代りたりし
が、また權勢を振ひて大平王唐其勢を殺し、皇后を弑し、遂に窃に異
謀を懷きて、一日帝に出獵せんことを請へり。然れども伯顔の養子
脱々養父と合はずして實を帝に奏せしかば、帝乃ち伯顔を外貶し、
人をして途に之を殺さしめたり。

流賊の蜂起

元は世祖の時より國用給せずして頻に聚斂を行

弊元の衰

ひ、また盛に交鈔を發行せしかば、年を経るに従ひ、財政愈々紊れて物
價益騰貴し、庶民殆ど其生を安せざるに、至れり。加之朝政は權臣の

手中に歸して、國人の憤怨を買ひ、帝師の勢威は百僚を凌ぎて遂に
僧侶の驕横を來せり。是に於てか天下騷然として盜賊各地に蜂起
す。方國珍の台州に、韓山童の永平に、劉福通の潁州に、郭子興の滁州
に、張士誠の高郵に、又陳友諒の漢陽に起れるが如し。

朱元璋

元の滅亡

時に濠州の僧朱元璋もまた郭子興に従ひて兵を起

したりしが、子興衰ふるに及び、別に自ら師を出して、江東の各地を
略し、方國珍を誘降し、陳友諒を撃破し、府を金陵南京に開きて國を吳
と號せり。然るに當時元廷は内訌頻に興りて、又天下の騷亂を顧る
に違あらずりしかば、元璋之に乗じて先づ江岸の諸賊を掃ひ、更に
兵を南北に分ち、南は胡廷瑞楊璟等をして廣東廣西を定めしめ、北
は徐達常遇春等をして元の大都に迫らしめぬ。因て順帝は止むを
得ずして上都に引退し、元璋は金陵南京に即位して國を明とい
へり。明の太祖即ち是なり。時に西紀一三六八年にして元は世祖よ

明

り此に至るまで、凡十世八十八年にして全く中原の地を失へり。

第三節 宗教

外教の好遇

元の國是 元は政治宗教共に開放主義を以て國是となし、外人を任用し、外教を好遇せること最も著しかりしかば、國內の諸宗教は皆自由の競争をなすことを得たり。今當時の諸宗教中、最も重要な關係を有せるもの一二を擧ぐれば左の如し。

喇嘛教 喇嘛教は祈禱禁咒を主とせる佛教の一派にして、西藏に發達せしものなり。佛教が印度のチポールより始めて西藏に傳りしは、西紀七世紀の事なりしが、其後異端の反抗を排して漸々國中に流行し、元の時は既に一大勢力となれり。かるが故に元の世祖は西藏を征定するに當りて之を利用し、教主八思巴を擧げて帝師とあし、其命をして詔勅と並び行れしめしが、他日喇嘛教の益發達

八思巴

シフラン
派スコ
チスト
リウスト
派

するに至りしは實に之に基けり。
基督教 基督教の一派なる景教は唐の武宗の時佛教と共に斥けられて久しく其跡を絶ちしが、元に至り再び東流して中國に入れり。蓋し當時歐羅巴人にして支那に來遊せし者極めて多く、フランシスコ、チストリウス二派の宣教師も亦來りて布教を試みしなり。是より基督教は再び東洋の宗教界に一要地を占め、明清に至りて益隆盛となれり。

第四節 明の初葉

國內の鎮定

太祖の經營 太祖の位に即くに當り、元の順帝は尙上都にありて帝號を稱し、明玉珍の子昌は四川に據りて夏王と稱し、元の宗室把匝刺瓦爾密は雲南に據りて梁王と稱せしかば、太祖は常遇春、李文忠等を遣して上都及應昌を略取せしめ、湯和、傅友德等を遣して

制度の
改革

四川を定めしめ、傅友德、藍玉等を遣して、雲南を平けしめたり。かくて中原の地は全く明の治下に歸せしかば、太祖は銳意内治を圖りて制度律令を定め、風俗習慣を改め、悉く元朝の遺風を變じて唐宋の舊に依れり。

諸子の
分封

帝はまた宋元の孤立して亡びたるに鑑み、一方には大に諸子を分封して外變に備へ、一方には刑罰を厲行して殆ど功臣宿將を殺し盡せり。然れども此政策は遂に其極に走り、北邊の諸王は漸く強盛にして却て中央政府の禍となれり。

燕王
棣

永樂の亂 太祖崩じて惠帝位に即くや、黃子澄は漢の七國を平けし古例により、北邊諸王を制馭せんことを奏せり。惠帝其議を納れ、先づ周王、湘王、齊王、代王等を廢黜せしかば、燕王棣は遂に反旗を翻して所謂靖難の師を興し、四紀一三寧王の兵を奪ひて頻りに官軍を破れり。然れども帝は鐵鉞等をして叛兵を濟南より擊退せしめ

しかば、燕王は止むなく北平京師に還りて暫く時期の來るを俟てり。已にして宦官の帝を怨望して、京師の空虚なることを燕に密告するありしかば、燕王乃ち大舉して京城に迫り、帝の城中に焚死するに及びて自ら帝位に登れり。是を成祖皇帝と稱す。時に永樂元年にして、西紀一四〇三年に當れり。

黎季
犛

天平

安南の征定 成祖位に即きて志を四方に懷き、先づ兵端を安南と啓けり。初め安南王陳日焜の臣に黎季犛なる者あり、日焜を弑して王位を奪ひたりしが、四紀一三幾もなくして位を其子蒼に譲りぬ。因て日焜の子天平は明に來投して之を訴へしかば、成祖は使を遣して蒼を詰責し、蒼は罪を謝して天平を迎立せんことを請ひたり。然るに天平の歸國するに及び、蒼は前約を食みて之を要殺せしかば、帝大に怒りて張輔等をして蒼を討たしめ、遂に季犛及蒼を虜にして其全土を明の有となし、安南を改めて交趾と稱し、交趾布政司

を置きて之を統べしめたり。四紀一四

鬼力赤

阿魯台

本雅失里

韃靼の征討 元は北方に引退せしより、弑虐相繼ぎしが鬼力赤に至り、始めて國號を韃靼と稱して自ら其可汗となれり。已にして阿魯台其主鬼力赤を弑して元の貴族本雅失里を可汗となししが、明の招に應せざるのみか却て其使を殺ししかば、成祖は大軍を督して塞北に出でぬ、本雅失里は到底敵すべからざるを知りて西に奔り、阿魯台も亦同時に東に奔りしかば、帝は親ら本雅失里の兵を幹難河邊に破り、又別に兵を派して阿魯台の軍を追撃せしめて還れり。

瓦剌部

其後韃靼の西なる瓦剌部漸く強盛にして阿魯台を撃破し、阿魯台は窮蹙して降を明に請ひしが、數年にしてまた反して邊に寇せり。是に於て帝は再び親征して之を奔らせしと雖も、阿魯台は尋で自ら可汗となりて入寇益甚しかりしかば、帝また親ら之を征し、歸路

疾に罹りて崩せり。四紀一四

第五節 外患の頻繁

瓦剌の入寇

成祖より仁宗宣宗の二帝を経て英宗の末年に至り、明は瓦剌の爲に大打撃を被れり。瓦剌はもと蒙古の一部屬なりしが、蒙古の瓦解するに及びて、其部に脱權なる者起り、韃靼の阿魯台を攻殺して元の後裔脱々不花を立て、自ら其相となりて頗る權を弄せり。

脱權

也先

土木

脱權死して其子也先嗣ぐに至り、勢益強盛にして明と和を破り、大舉して先づ大同に寇せり。警報日に京師に至るに及び、英宗親しく土木に出征せしかば、也先は之を襲ひて大勝を收め、帝を虜にして更に京師に向へり。是に於て明は新に景宗を立て、英宗を上皇となし、堅く京城を守りて敢て降らず、援兵また尋で四方より來り

會せしかば、也先は氣大に沮みて遂に其師を班し、四九一年四次で上皇を明に還して意を南侵に斷てり。

韃靼の侵寇 英宗國に歸りて帝位を復するに及び、也先は其主脱々不花を弑して田盛可汗と稱したりしが、幾もなくして部下阿刺の爲に弑らせれき。韃靼部の長孛來尋で起りて阿刺を殺し、脱々不花の子麻兒可兒を立て、始めて小王子と號し、兵を率ゐて大同附近に寇せり。

ト赤 時に明は英宗既に崩じて憲宗位にありしが、帝崩じて孝宗立つに至り、元の後裔ト赤ある者小王子となりて自ら大元可汗と稱し、賀蘭山に據りて青海地方を併せ、屢兵を出して明の北邊を侵せり。但し世宗の時に至りては、ト赤稍兵を厭ふて幕を遼東邊外に徙したりしが、其族俺答は尙河套に據りて侵掠を恣にし、或は大同、延綏諸邊を侵し、或は進みて京師に寇せり。然れども穆宗の時に至り、俺答

俺答

ト赤

小王子

款を明に納れて順義王の封を受しかば、北邊始めて安寧なることを得たり。四九一年七〇年

倭寇 明はまた倭寇の爲に痛く國力を消耗せり。倭寇とは我邦海賊の入寇にして、既に元の頃より起りしものなり。蓋し當時は我邦に南北朝の騷亂ありて、財用空乏し、政令地方に行れざりしかば、西海附近の諸豪族は私に元及高麗と通商を開き、無頼の徒これに加して半商半賊を業となせり。

半商半賊

元亡びて明興るに及び、倭寇は益甚しく、方國珍、張士誠等の餘黨皆之と結びて海上に出沒せしかば、太祖は沿海に防倭衛所を設けて之に備へ、宣宗は我と勘合符を授受して其患を除かんことを謀れり。然れども倭寇は依然として持續し、殊に世宗の時は明の海禁稍弛みしかば、わが海賊は之に乗じて連年彼が沿海を蹂躪せり。是に於て世宗は全力を盡して漸く之を平定せしと雖も、我邦人は尙臺

防倭衛所

臺灣に據る

灣を占有しき。

朝鮮の興起 元の盛なりし間は、高麗海東の地を保存して偏に之に恭事せしが、その漸く衰亡するに及び、元の年號を停めて明の正朔を奉せり。然るに辛禡の時に至り、明の爲に鐵嶺以北の地を奪れしかば、王は之を復せんを欲し、崔瑩、李成桂の二人を將として遼東を犯さしめたり。

李成桂

諸軍既に鴨綠江を渡るに及び、成桂は忽ち軍を班して大邦を犯すの不可を論じ、辛禡を江華嶋に移し、其子昌を立て、尋で之を廢して恭讓王を擁立し、遂に其禪を受けて自ら王位に上り、使を明に遣して國號及冊封を請へり。是に於て明の太祖は國號を朝鮮と賜ひ、尋で成桂を冊封して朝鮮王となせり。時に西紀一三九二年なり。

日明の衝突 朝鮮建國の事情右の如くなりしを以て、朝鮮は國初より偏に明に服事し、また使を遣して好を我足利氏に通せり。然

豊臣秀吉

るに足利氏の末葉より、倭寇愈甚しくして日韓の交全く破れたりしが、豊臣秀吉出でて國內を統一するに及び、威を國外に振はんと欲して、先づ朝鮮の來聘を促し、國使來るに及びて更に之に道を借りて明を征せんとせり。

小西行長 沈惟敬

是に於て朝鮮の昭敬王は大に驚きて急を明に報じ、且つ邊備を修めて豫め之に備へたりしが、我軍の來討するに及び、文祿元年即ち西紀一五九二年朝鮮八道は忽にして瓦解せり。時に明の神宗は朝鮮の急を聞きて援兵を出したりしが、其兵の大敗するに及びて、始めて我軍の侮る可らざることを知り、且つ我軍も當時會糧食に窮したりしかば、小西行長は沈惟敬と謀りて一旦和議を結びぬ。然るに明使日本に來りて和意を通ずるに至り、其條件悉く秀吉の意に違ひしかば、秀吉は重ねて大兵を起して朝鮮半嶋を蹂躪せしめたりとも、幾もなくして病に罹りて薨せしを以て、慶長三年即ち西紀一五九八年朝鮮は併呑の厄を免れ、明

は侵寇の難を避くるを得たり。

第六節 明の末葉

清の太祖の蹶起　かく明室の外患甚しき時に當り、滿州の野は更に明の一勁敵を生じぬ。清の太祖愛親覺羅アイシンギヤロ奴兒哈ヌエハ赤セキ是シなり。愛親覺羅氏は女眞の後にして、もと寧古塔ニギトに居りしが、後赫圖阿刺ヘクトアラクに遷りて國を滿珠といへり。

愛親覺羅氏
後金

太祖歳廿五にして始めて父祖の仇尼堪外蘭ニカンガイランを破り、次で滿州長白東海扈倫等コレンの近隣諸部族を攻略して遂に帝位に上り、國號を立て、後金といへり。時に西紀一六一六年なり。是に於て明は兵二十餘萬を以て瀋陽を固めたりしが、太祖は之を破りて遼水以東の七十餘城を下し、先づ都を遼陽に遷して兵を遼右に出し、更に瀋陽シヤンヤウに移りて益明の蠶食を圖れり。

金明の交戦

顧憲成

東林の黨争　初め顧憲成の神宗に斥けられて學を東林書院に講ずるや、士大夫の林野にある者皆之に響附し、講學の餘往々朝政を諷議し、人物を裁量せり。

是に於てか當時朝政を恣にせる宣崑二黨は互に相結托して憲成等を東林黨となし、苟も之に與する者は皆外に排斥せんことを謀れり。然れども東林黨は葉向高顧憲成趙南星等を首領として一旦勢を得しと雖も趙煥の吏部尙書となるに及びて、皆罷めて朝を去れり。

葉向高
趙煥

神宗崩じて光宗嗣ぎ、光宗また急に崩じて熹宗位に上るに至り、東林黨は挺撃紅丸移宮の三按を以て反對黨を攻撃し、再び朝に列して葉向高を相となせり。然れどもその内閣は久しからずして魏忠賢等の爲に破られ、有力の士は悉く邪人として殺戮禁囚せられたり。

魏忠賢

流賊の蜂起 西紀一六二八年毅宗帝の位に即くや、偶、西北の地に凶歳ありて、人民飢餓に苦みしかば、張獻忠、李自成の二人共に流賊の長となりて諸方を轉掠しき。

張獻忠

獻忠は延安の人にして陰謀多く、山西より起りて陝西湖廣の各地を亂ししが、官軍の將左良玉に破られて一旦降を官に請ひしと雖も、後また反して蜀を略し、毅宗の末年に至りて病死せり。自成は米脂の人にして獻忠と共に事を起ししが、當初は屢官軍に破られて或は降り或は反したりしが、十有餘年を経るに及び軍勢漸く振ひ、河南を席捲し、荆襄を陥れて自ら奉天倡義大元帥と稱し、次で西安に據りて大順王と號し、更に北進して京師に迫れり。是に於て毅宗は勤王の兵を召して之を禦ぎしと雖も、利あらずして煤山に自刎し、自成其太子を虜にして自ら帝位に上れり。時に西紀一六四四年なり。

李自成

清の南進

清

後金は太祖の子太宗の世、西は察哈爾部を伐ち、南は朝鮮を征して、始めて國號を清と改め、更に兵を明に加へて屢、河北の諸郡を蹂躪せり。太宗の子世祖の嗣立するや、また父祖の遺志を承けて征明の大師を發し、睿親王多爾兗をして之を督せしめぬ。時に明廷は李自成の燕京に逼れるを以て對清の總兵吳三桂を召還せしかば、三桂は直に軍を旋して赴援したりしが、途にして京城既に陥りて帝自ら崩せりと聞き、乃ち清に降りて共に自成を討たんことを請へり。因て世祖は多爾兗をして三桂と共に燕京に進みて自成を擊破せしめ、尋で都を燕京に遷して重ねて自成を潼關に破りしかば、自成は遁走して遂に人に殺されたり。

多爾兗
吳三桂

明の滅亡

福王

是に於て明は殆ど其版圖の北半を失ひたりしと雖も、尙毅宗の兄福王由崧を南京に擁立し、史可法をして清兵を江北に禦がしめしかば、世祖は兵を遣して南京を陥れ、福王を蕪湖に虜

唐王

にして嚴に剃髮の令を布けり。因て明は更に唐王聿劍を福州に立て、紹興の魯王海と相應援して江西浙江福建の諸地を固守せしが、清はまた諸將を分遣して福州を陥れ、唐王を汀州に生擒せしめたり。時に桂王由榔は肇慶にありてまた帝と稱せしが、戰敗れて緬甸に遁れ、魯王も亦敗れて廈門の鄭成功に投じき。

桂王

魯王

鄭成功

成功は芝龍の子にして、我長崎の女の生みし所なり。是より先き芝龍清に降りて成功を誘ひしと雖も、成功は敢て之に應ずるの色なく、頻に兵を出して明室の恢復を圖り、鎮江南京の如きも一時は皆其有に歸するに至れり。然れども清兵益強くして遂に之を撃破せしかば、成功は止むなく魯王を奉じて臺灣に據れり。

鄭經

鄭克塽

幾もなくして魯王成功相次で歿したるも成功の子經は尙臺灣を保有して明の年號を用る。三藩の亂に乗じて、大に福建廣東の沿岸を蹂躪せしが、子克塽の時に至りて、遂に清將施琅の爲に征服せら

れたり。時に西紀一六八三年にして、我天和三年に當れり。

明の學術

明の學術中最注意すべきを儒學及文學とす。儒學は

王守仁

宋以來性理の學大に行れて元の學者は只之を墨守せしに過ぎざりしが、明の太祖及成祖の二帝は大に學術を振興せしかば、遂に大儒王守仁を出せり。守仁は號を陽明と稱す。曾て室を陽明洞中に築きて佛老の學を修めしが故なり。其學陸象山に基きて更に一機軸を出し、良知良能を以て根本主義となせり。蓋し希世の大學者にして、眼識遙に宋儒を凌駕せりと云ふ。

施耐庵

文學は元代より既に戯曲小説を生じ、戯曲には琵琶記西廂記、小説には施耐庵の水滸傳の如き好著ありたりしが、明に至りては詩文と相伴ひて益發達し、遂に西遊記金瓶梅等の奇書を出すに及べり。

第七節 西南諸國

欽察國

元の三汗國の沿革

元の三汗國中最も盛なるは欽察其横領の金色なり

別兒哥

ルオトルグにて其版圖西はカルバチア山脈より東はシール河の下流に至れり。拔都汗の後別兒哥汗出で、更に兵威を歐洲諸國

月即別

に示し、月即別汗に至りて、婚を埃及土耳其莫斯科等の諸國と結び、

白黨

金黨の威名は一時歐亞二洲に振ひたりしが、後白黨の主圖克達密西汗の爲に篡奪せられたり。白黨は求赤の長子幹魯朶の建てし國

伊蘭國

にして、其境域西はウラル河に至り、南は裏海及アラル海に接せり。伊蘭國は旭烈兀の子孫世々位を踐みて常に元帝を大汗となせり。

カザン

諸汗の中カザン汗は最英明にして、内は法度を改め、外は埃及を破り、好を歐洲列國に通じて國勢日に盛なりしが、其後漸く衰へて明初に至り、遂に帖木兒伯克の爲に討滅せられたり。

察合台國

察合台國は嘗て海都汗と通じて元に抗したりしが、後ち察八兒汗の元に降るに及び、國勢また收拾す可らざるに至れり。然るに明の

帖木兒伯克

初世に當りて、其中より帖木兒伯克なる者起り、先づトランスオキシアナ、カシニガル、ホラズム、コラッサン等の地を併せ、遂に伊蘭國を全滅して、更に兵を四方に動せり。

帖木兒の征戰 帖木兒西征の師を率ゐて波斯のイスバハンに

帖木兒の北伐

あるや、白黨の圖克達密西汗はホラズムを恢復せんと欲して帖木兒の領内に侵入せしかば、帖木兒は師を班して之をアムー河畔に破り、更に兵を整へて欽察に侵入し、圖克達密西をキエフに逐ひ、莫斯科を伐ち、アストラハンを略して還れり。

帖木兒印度に入る

其後帖木兒は印度に侵入して特里を蹂躪し、更に長驅してガンガ河邊に達しき。

當時オトマン土耳其はサルタン・バヤジードの下に在りて強大を極め、將に東羅馬帝國を討滅せんとするの勢を示したりしかば、帖木兒はまた師を西方に出し、西紀一四〇二年を以て大に土耳其

バヤ
ロート

兵を小亞細亞のアンゴラに破り、遂にバヤロートを生擒せり。既にして帖木兒は明を滅して成吉思汗の遺業を復せんと欲し、大兵を擁してアムール河を渡りしが、病に罹りてオトラールに死せり。時に西紀一四〇五年にして、我應永十二年に當れり。

ガズニ

マム
ド

莫臥兒帝國の興亡 印度は十一世紀の初年より回教徒の侵略する所となれり。十世紀の下半紀に當りて、今の阿富汗斯坦にガズニといへる回教徒の一強國を生じたりしが、梭里檀マムドの時、屢印度に侵入して佛教の撲滅を圖れり。後ガズニ朝衰へて瞿爾朝之に代り再び印度に侵入してペナーレス地方に及び、遂に印度の北部は皆回教徒の手に落つるに至れり。かくて奴隸ギルナの二朝を経てトグラク朝に至り、帖木兒の侵寇に逢ひて國政痛く衰へ、路提朝更に之に代れり。

瞿爾朝

然るに路提朝もまた久しからずして民心を失ひしかば、帖木兒の

婆伯爾

亞克婆
爾

澳蘭具
塞布

ナザル
シヤール

立孫婆伯爾之に乗じて屢カブールより印度に侵入し、遂に路提朝を滅して莫臥兒帝國を興し、都を特里に定めて北印度に君臨せり。婆伯爾の後一世を経て亞克婆爾に至り、國力大に興りて中印度及東印度を平定し、都をアグラに移して意を國民の撫育に盡し、信教の自由を許し、非回教税を廢して頻に婆羅門教徒を登庸せしかば、上下皆悦服して帝に奉ずるに大帝の號を以せり。

阿克婆爾崩じて西利牟嗣ぎ、西利牟崩じて澳蘭具塞布嗣ぎ、兵を南印度に用ゐて國威復振ひたりしが、非回教税を復するに及びて痛く人望を損じぬ。是を以てラザプト人は帝の崩御に乗じ、南印度に起りて各地の反徒を煽動し、遺子また位を争ふて國內大に亂れたりしが、後數世にしてモハメト帝に至り、更に波斯のナザル・シヤールの爲に國都を蹂躪せられしかば、莫臥兒帝國は遂に全く瓦解して、諸侯其命を奉せざるに至れり。

第八章 清朝時代

第一節 清の進取上

三藩

三桂の反

精忠の反

三藩の鎮定 世祖崩じて聖祖康熙帝位に即くに至り、所謂三藩の叛を生じぬ。三藩とは平西靖南平南の三王にして、皆嘗て清に降りし者なり。初め平南王尚可喜老病の故を以て藩を撤せんことを請ふや、朝廷容易く其請を納れしかば、平西王吳三桂靖南王耿精忠の二人もまた自ら安ずること能はずして、試に藩を撤せんことを請ひたりしに、朝廷之を察せずして其請を納れしかば、三桂先づ反して檄を遠近に傳へ、自ら天下都招討兵馬大元帥と稱して雲南貴州の諸州を侵せり。

是に於て朝廷は平南靖南の二王を復し、且つ兵を出して三桂を伐たしめたりしが、賊勢日に盛にして官軍更に志を得ず、精忠も亦尋

尙之信

吳世璠

で反して福建を擾し、陝西の提督王輔臣明の遺臣鄭經等は之に應じて諸州を蹂躪し、尙可喜の子之信も亦陰に三桂に通じて、其父を幽し、檄を郡縣に移して將に兵を出さんとせり。

然れども是より賊勢漸く傾きて官軍頻りに其侵地を復ししかば、之信は賊に附きしを悔いて竊に欵を江南の官軍に通じ、精忠は進退谷まりて降を康親王に請ひ、三桂は尋で病死して孫世璠一時賊の首領たりしが、官軍に追窮せられて雲南の滇城に奔り、遂に自殺しぬ。四一六
一八一年

子ルチンスクの條約 三藩の反平ぐに及び、聖祖は先づ臺灣

の鄭克塽を滅し、更に意を北方に轉じて、露人とチルチンスクの條約を結べり。

露國が哥薩克人を用ゐて始めて西比利亞を侵略せしは西紀十六世紀の下半なりしが、十七世紀の中頃に至り、ボヤルコフ及ハマロ

ボヤルコフ

ハバロ
イフ
アル
ザン

ト
ブル

噶爾丹
三汗の
來投

一フの二人出で、ボヤルコフは黒龍江の下流を探検してオホツク海に達し、ハマローフは其上流を探検して城をアルバジンに築き、共に力を盡して江岸の地を經營せり。時に清は世祖の治世にして、未だ北方を顧るに違あらざりしが、聖祖の嗣立するに及び、先づ愛琿城を築きて之に備へ、尋でアルバジン在留の露人に退去を諭せり。然るに城將トブルジン固く城を守りて其命を拒みしかば、帝は兵を派して之を撃退せしめ、遂に露帝アレキサンダー二世と共に各使を派してテルチンヌクの條約を結ばしめ、悉く露人の侵地を復し、格爾必齊河を以て清露の國境となせり。四一六
八九年

喀爾喀の内附 喀爾喀は乃ち外蒙古にして、元の後裔土謝圖車臣札薩克圖三汗の分領せし所なりしが厄魯特の準噶爾部より噶爾丹なる者起りて之に侵入するに及び、三汗は遂に敗走して清に投せり。かくて噶爾丹は全く喀爾喀を奪ひ、更に三汗を追ふを名と

噶爾丹
の自殺

策妄拉
布坦

して、内蒙古に來寇せしかば、聖祖は親しく大兵を督して其兵を昭莫多に破れり。

時に噶爾丹は外征日久しくして、準噶爾は既に其姪策妄拉布坦に併せられ、且つ先きに略定せし回部青海の二地も亦皆離反して、身を寄するに所なく、清兵の再び之を追窮するに及びて遂に自殺せしかば、帝は三汗を喀爾喀に歸して、之に清の治を布かしめたり。四
七一六
七年

西藏の鎮定

西藏は唐古特の後裔之を領して、青海喀木衛藏の四部に分れたりしが策妄拉布坦厄魯特の全部を併吞して國威益振ふに及び遂に之に侵入して拉藏汗を襲殺せり。

是に於て聖祖は傳爾丹噶爾弼等を西藏に遣して悉く策妄拉布坦の兵を擊攘せしめ、拉藏汗の舊臣二人を擧げて前藏後藏を分治せしめ、且つ達賴喇嘛に封を加へて國教を總統せしめたり。

第二節 清の進取下

準噶爾の討平 聖祖崩じて世宗雍正帝位に即くに至り、青海の主羅卜藏丹津反して西寧を侵ししが、清兵の來討を被るに及び、走りて準噶爾に投せり。因て世宗は使を準噶爾に遣して之を索めしめしむ。策妄拉布坦敢て其命を奉せざりき。かくて策妄拉布坦死して子噶爾丹策零立ち、性狡猾にして屢清の西邊に寇せしかば、世宗乃ち兵を發して之を征じ、交戦六年に亘りて僅に阿爾泰山東の地を定むるを得たり。

世宗の西征

達瓦齊

阿睦撒納の反

世宗崩じて高宗乾隆帝の位を嗣ぐに至り、策零また死して達瓦齊汗位に在りしが、其族阿睦撒納之と合はずして來りて準噶爾の取るべきことを奏せしかば、帝は班第永常の二將を遣して阿睦撒納と共に之を伐たしめ、達瓦齊及羅卜藏丹津を得たり。

阿睦撒納の反

然るに阿睦撒納尋で反して駐防の清兵を破り、頻に四方を煽動して準噶爾再び動搖せしかば、高宗また諸將を派して之を伐たしめ、遂に阿睦撒納を露西亞に逐ふて全く準噶爾を平定せり。時に西紀一七五七年にして我寶曆七年に當れり。

回部の征定

回部は即回疆にして天山南路の地なり。初め喀什噶爾汗の子博羅尼都霍集占の二人は共に執へられて準噶爾に在りしが、清兵の之を征定するに及び、請ふて其舊都を復せり。然るに

博羅尼都霍集占

阿睦撒納の事を擧ぐるに當り、霍集占は準噶爾に在りて之に通じたりしが、既にして阿睦撒納の敗走するや、國に歸りて兄博羅尼都と共に更に大亂を作せり。因て高宗は兆惠を將として其根據葉爾羌及喀什噶爾を抜かしめしかば、二人は已むを得ずして巴達克山に走り、遂に其酋長の爲に擒殺せられたり。西紀一七六二年是に於てか清の威名は遂に蔥嶺以西に振ひ、布魯都哈薩克愛烏罕

浩罕巴達克山等の諸族皆使を遣して好を通せり。

高宗の外征 高宗既に天山の南北を略定して、四海悉く清の化に浴するに至り、更に力を南方に轉じて緬甸、金川、安南、廓爾喀等を伐てり。

緬甸を征す

緬甸は當時阿瓦に都して、夙に清に朝貢せしが、雍籍牙の王位を篡奪するに及び、始めて清と絶ちて屢邊境に入寇せり。高宗先づ雲貴の總督明瑞を遣して之を伐たしめしが、その戦死するに及び、更に大學士傅恒を遣しぬ。緬甸は之と金沙江上に戦ひて大敗し、勢屈して遂に和議を請へり。

金川を征す

金川は金沙江上にありて大小二部に分れたりしが、高宗の世土司莎羅奔なる者始めて反旗を翻して傅恒の爲に征服せられたりしが、莎羅奔の姪郎卡次で土司となりて桀驁を極め、子索諾木は僧柔格と共に遂に反して四近を攻略せしかば、高宗は阿桂を遣して悉

安南を征す

く金川地方を征定せしめぬ。當時安南は國號を越と稱して、黎氏之に王たりしが、阮文惠なる者起りて王位を篡奪するに及び、使を清に遣して援を請へり。因て高宗は孫士毅を遣し、阮文惠を撃破して黎氏を位に復せしめたりしが、阮文惠は其後再び黎氏を逐ひて自ら東京王と稱し、清の再征を恐れて封を請へり。

廓爾喀を征す

廓爾喀即ち印度の捏巴爾は偶後藏に内訌あるを機として之に侵入せしかば、高宗乃ち福康安を遣して先づ藏地を清め、遂に進みて廓爾喀に入り、且づ傍近の諸國をして共に進攻せしめしかば、廓爾喀は進退谷まりて降を軍門に請へり。

康熙乾隆の文運 康熙乾隆二帝の武勳は概ね以上の如くなりしが、二帝はまた各文學を尙びて治世の一方便となし、大に碩學鴻儒を集めて勅選の大著述をなさしめたり。是を以て清の文運は鬱然

として二帝の世に興り、經史研究の風は一變して考證學となり、文章詩賦の術も亦大に進みて、遂に千載不滅の傑作を出すに至れり。

第三節 歐人の東侵

葡萄牙人の渡來 歐羅巴人にして先づ東洋と海上の通商を聞ける者を葡萄牙人とす。葡國は夙に印度の富饒なるを慕ふて、之と直接の貿易を試みんと欲し、西紀一四九八年を以て始めて伊人バスコ・ダ・ガマを印度のカリカットに遣ひ、尋で沿海の地を略して互市場を設け、且つフランシスコ・アルメイダを葡領印度太守となして、東洋貿易の振興を圖らしめしかば、葡人の勢威は日に東洋に振ひて、前後兩印度の商權を掌握し、且つゴア、錫蘭、マラッカ等の諸要地を略取して殖民の用に供せり。

英蘭二國人の渡來 葡人に次ぎて東洋に渡來せし者を英吉利

バスコ・ダ・ガマ

葡人獨盛

人及和蘭人とす。英人は西紀一五九一年を以て、蘭人は之に後ること五年にして來れり。然れども和蘭はもと商業國にして、其商人は最も機敏なりしかば、遂に葡人の商權と領土とを奪ひ、バタビヤを東洋貿易の中心となし、且つ英人とも爭端を開きて、悉く之を東印度諸嶋中より驅逐せり。

英佛二國人の勝敗 かくて西紀一六二四年に至り、英人遂に蘭人を擊破して其領域を略したりしが、佛人も亦此頃より印度と通商を開きて、佛蘭西東印度商社をボンデシユリーに立て、英人の勢威日に盛なるを忌み、頻に之と商權を爭へり。

佛人の渡來

デニエ
レ

既にして、デニエー佛領印度の總督となりてボンデシユリーに來り、莫臥兒帝國併呑の雄圖を懷きて、巧に諸侯の攻伐に干渉し、遂に漁夫の利を收めて、ボンデシユリー附近の數國を併有せり。時に英國東印度商社の一書記にクライブなる者あり、先づ佛人と通せるカー

クライブ

ナナック侯を討滅して英人の威力を示し、遂に全く佛人を排して、ベンゴールの土侯スラヂ、ウッドーラをプラッサーに撃破せり。是に於てかクライブは東印度商社の推薦を以て總督に拜し、益兵を動して英領印度の基礎を固ふせり。

ヘスナ
ングスナ

英領印度の確立 次でクライブの英國に召還せらるゝに及び、

ヘスナングス來りて其職を襲ぎ、ベンゴールを英領に加へ、オウドを保護國となし、且つ莫臥兒帝には年金を與へて無謀の師を動かすこと能はざらため、遂に英領印度の大總督となりて内外の諸政を改革せり。

かくて前印度の大半は既に英人の威風に靡きたりしが、各地の土侯は尙自ら尊大にして屢反抗を試み、マイソル侯は十八世紀の下半紀に領土の半を削られ、マラータの諸侯は今世紀の初年にウエルスレーの爲に討平せられ、シンド・パンヂャブの二地も亦その後數

諸侯の
滅亡

土兵の
亂

十年にして皆征定せられたり。

然るに西紀一八五七年に至りて土兵の大亂起り、莫臥兒帝を謀主に仰ぎ、不遇の諸侯を誘導し、西はデルヒより東はマトナに至る一帯の地を攪亂せしかば、英廷はカンニングを印度大總督に任じて漸く之を討平せしめ、莫臥兒帝國を全滅し、與謀の諸侯を所罰し、且つ東印度商社を廢して印度を英國女皇の直轄となせり。

阿富汗事件 是より先き露國は頻に南侵の策を講じて中央亞

細亞を略し、將に阿富汗斯坦に迫りて印度に出づるの道を開かんとせしが、偶、カブールに内亂起り、豪族ドスト・モハメッドなる者王位を篡ひ、廢王シャー・スーヂャは國を脱して印度の英人に投せり。印度大總督オークランドは、之に乗じて阿富汗斯坦を經營せんと欲し、義兵を出してシャー・スーヂャを復位せしめ、ドスト・モハメッドを捕へてカルカッタに送れり。

ドスト
モハメ
ド

オーク
ランド

アクバ

エレン
ボロン

シア
アリア
リット
ヤクブ

然るに國人ドスト・モハメッドを思ふてシャーサーヂヤを喜ばず、西紀一八四一年ドスト・モハメッドの子アクバーを奉じて亂を作し、英兵をクルド・カブール峠に要撃し、國王シャーサーヂヤを弑せり。是に於て英廷はオークランドを免じてエレンボローを印度大總督となり、カブールの亂を平定してドスト・モハメッドを復位せしめたり。かくてカブールは一旦英國の保護領となりしが、ドスト・モハメッド死して子シアアリア立つに至り、英人のケッタを取りしを怨み、之と斷ちて露國に通せしかば、印度大總督ロードリットンは再びカブールに開戦して、シアアリアを國外に驅逐し、其子ヤクブを立てて直に師を班せり。時に西紀一八七九年なり。然るにヤクブも亦幾もなくして英人と戦端を開きしかば、リットンは復兵を派して之を鎮定せしめたり。

緬甸の滅亡 緬甸は清の乾隆年間大に國運を挽回し、毘牛・暹羅

メンダ

ナーボ

阿臘于の三國を併せたりしが、西紀一八二四年を以て前印度の英人と争端を開き、連戦連敗して國都將に危からむとせしかば、國王メンダンは事の成らざるを知りて和議を求め、償金百萬磅を出し、阿臘于・メルガイ・タボイ等の地を割けり。

然れども王は尙驕慢にして英人を蔑視し、再び之と兵を交へて更に毘牛・マルタバン等の地を失ひたり。既にしてメンダン崩じて新王ナーボ立ち、性暴戾にして復英人と戦端を開きしかば、英軍はマンガレーを陥れて、ナーボをボムベイに送り、全く緬甸を滅して英領印度の一部となせり。時に西紀一八八五年あり。

第四節 清の退守上

嘉慶の諸亂 乾隆の末年より苗搖教匪往々亂を作して、天下漸く騒然たり。高宗崩じて仁宗嘉慶帝立つに至り、白連教徒遂に大に

白連教
匪

湖北に起りて、河南陝西甘肅の諸州を攪亂し、四川の賊徐天德、王三槐の二人も亦之に乗じて四川を抄掠せり。是に於て帝は額勒登保に命じて之を伐たしめ、嘉慶七年に至りて漸く之を平定することを得たり。

蔡牽 朱漬

時に海盜蔡牽は臺灣附近に出沒し、粵賊朱漬も亦之に加りて頻に各地を標掠せり。是に於て浙江の提督李長庚諸鎮の兵を合せて屢之を破り、遂に臺灣を鎮定して牽を安南に逐ひしが、牽は再び歸り來りて更に漬と合せり。然れども廣東の巡撫沅元謀を以て之を離間せしかば漬は閩に走りて戦死し、牽も亦定海に敗死せり。

張格爾

回部の亂 初め博羅尼都の孫張格爾乾隆の役に脱走して浩罕に在りしが、回部南路の參贊大臣斌靜驕暴にして人心を失ふに乘じ、祖業を復せんと欲し、來りて邊に寇せり。四紀一八 二〇年是歲仁宗崩じて宣宗位に登りしが、張格爾は竊に回部の教徒と通

布魯特

じて之を耳目となし、官兵の空虚なるに乗じて屢喀什噶爾附近に寇しき。是に於て領隊大臣色彥圖は之を追ひて塞を出でしが、勢に乗じて遊牧の布魯特人を殺戮せしかば、布魯特の酋長大に怒りて清兵を山谷に追覆し、張格爾及浩罕の酋長も亦大舉して回部に侵入し、鎮將慶祥を撃退して喀什噶爾葉爾羌和闐等を攻陥せり。宣宗仍て陝甘の總督楊遇春に命じて哈密に赴き、長嶺等と會して賊の侵地を恢復せしめ、遂に張格爾を生擒して浩罕の互市を絶ちしが、其後浩罕の酋長モハメドの更に流寓の諸夷を率ゐて來寇するに及び、復互市を許して入貢せしめたり。

鴉片戰爭 英人は明の時より既に支那に通じ、康熙雍正の際より廣東に來りて貿易に従事せしが、その商人はもと東印度商社より派出せし者なりしを以て、盛に印度より鴉片を輸入せり。然るに清廷は鴉片の民生に害あるを以て、乾隆以後頻に法を案じて之を

防がんとせしかば其功なく、宣宗の時には鴉片の歳入三萬四千兩の多きに達せしかば、帝は林則徐を廣東總督に任じて、之が禁止の策を講せしめたり。

林則徐

林則徐の廣東に赴くや、英商に嚴談し、悉く蓄ふる所の鴉片を獻せしめて之を燒却し、且つ令を發して英人の互市を嚴禁せり。是に於てか英人大に怒りて軍艦を派遣し、廣東・香港・舟山・寧波等を攻撃したる後、和意を北京に通せり。宣宗仍て使を廣東に遣して、英人と會見せしめたりしが、和議遂に成らずして、英兵また廈門・定海・乍浦・鎮江等を陥れしかば、帝は時運を察して、伊里布・耆英の二人を南京に遣し、更に英人と會見して和議を定めしめ、償金二千六百萬兩を出し、香港を割讓し、且つ廣州・福州・寧波・廈門・上海の五港を開きて互市場となせり。時に西紀一八四二年なり。

南京條約

長髮賊の興起 鴉片戰爭の終局後數年にして清廷はまた洪秀

全の大亂に苦めり。初め廣東・廣西の二省は地大に饑乏て盜賊各地に蜂起せしかば、秀全之に乗じて兵を廣西に起し、天主教を利用して頻に愚民を誘動せり。四紀一八

既にして宣宗崩じて文宗位に上り、林則徐・李星沅等を遣して之を伐たしめたりしが、賊兵日に盛にして官軍志を得る能はず、尋で秀全は自ら太平天國王と稱し、馮雲山・楊秀清・韋昌輝等と共に岳州・漢陽・安慶等の諸要地を略し、遂に府を金陵に開きて制度律令を撰定せり。

金陵

曾國藩

偶、刑部侍郎曾國藩は親の喪に服して湘郷に在りしが、官軍の連に利を失ふを聞き、自ら郷勇を募りて湖南を保持し、且つ兵を出して武昌・漢陽を恢復せり。然れども賊勢毫も衰ふる色なく、其將秀清は直に來りてまた漢陽及武昌を下し、且つ屢、湖北の巡撫胡林翼の兵を破りたりしが、幾もなくして賊軍中に内訌起り、秀全止むなくし

胡林翼

て秀清昌輝の二將を殺しき。是より官軍漸く勢を得、林翼は漢陽武昌を、國藩は江西の諸縣を復ししかば、賊は尙陳玉成、石達開の二強將を有して、湖北、江蘇、江西、湖南及兩廣の諸州を蹂躪せり。

英佛同盟軍の來寇 是時に當り清は更に英佛と兵端を開きぬ。

初め英人の支那船を借り、長髮賊の黨類十二人を傭役にて廣東に來るや、廣州の府吏之を捕へしかば、英國の領事パークスは嚴に其不法を責め、遂に佛露米の三國と共に清廷を威嚇して、新に通商條約を天津に結ばしめたり。時に西紀一八五八年なり。

翌年英佛二國は共に使臣を派して批准條約を交換せしめんとせしかば、其艦將の白河に入らむとするに及び、河口の砲臺之を撃退せしかば、英佛二國は同盟軍を興して直に直隸灣に入らしめ、北塘太沽の二砲臺を破りて、遂に天津及北京を取れり。

是に於て清廷は始めて前非を悔ひ、皇弟恭親王を全權大使とし頻

パーク

同盟軍

恭親王

講和條
件

會國筌

華爾特

戈登

に和議を求めしめ、露國公使も亦其間に入りて、調停を謀りしかば、同盟軍は之を機として、償金千二百萬兩を取り、且つ牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口の七港を開かしめて、其局を結べり。時に西紀一八六〇年にして我萬延元年に當れり。

長髮賊の鎮定 清廷既に英佛と和して専ら長髮賊の討平に従事し、國藩を兩江の總督に任じ、浙江の巡撫曾國筌、大常、鄒左、宋棠等と共に、兵を分ちて屢、達開、玉成等の軍を破らしめたり。然るに秀全官軍の兵力を分ちて金陵の圍を弛めんと欲し、別に兵を出して一は浙江を犯し、一は上海に迫らしめしかば、上海の官紳相議して外兵を借らむことを朝廷に申請せり。

時に文宗崩じて穆宗位に上り、其請を納れて援を上海の外人に求めしかば、英、米、佛の三國人相議して之を助け、殊に米人華爾特は清兵に將として常勝軍の美名を博し、英人戈登また之に代りて益、奇

李鴻章

功を建てしかば、官軍彌勢を得、江蘇の巡撫李鴻章等も亦屢勝を奏せり。是に於て玉成達開の二人は相次で生擒せられ、秀全は金陵に圍まれて遂に自ら毒を仰ぎて死せり。時に西紀一八六四年なり。

第五節 清の退守下

清露の衝突　チルナンスクの條約以後清は國內多事にして北方を顧るに違あらざりしが、露は西比利亞總督を置きて漸く南侵の舊策を再演せしめ、殊に僧正インノケンナー將軍ムライヨーフの二人は共に生命を堵して黒龍江の侵略を謀り、先づ江口に民を移してニコライエヴスク港を開き、尋で我樺太島の北部を奪へり。此頃露國にはクリミアの大役ありて、英佛二國の軍艦共にオホツク海に來寇せしかば、ムライヨーフは益、黒龍江を開くの必要を感じ、長髮賊の内亂あるに乗じて、國界改定の議を清に提出し、遂に愛

インノケンナー
ムライヨーフ

愛琿條約

琿條約を結びて悉く黒龍江北の地を收め、且つ松花烏蘇里の二江を開かためたり。

清烏蘇里江東を割く

愛琿條約は西紀一八五九年を以て交換せられたりしが、尋で英佛同盟軍の北京を陥るゝに及び、露國公使は清國と英佛二國との間に立ちて調停に周旋する所ありしかば、清は其報として烏蘇里江東の地を露國に讓與しき。

伊犁事件

西比利亞經營の素志を貫きたる露國は更に中央亞細亞に地を拓きて再び清と衝突せり。當時清は西域大に亂れ、ヤクブベクの喀什噶爾を奪ふありしが、露軍は中亞の諸族長を征服したる後、之に戦を挑み、遂に西紀一八七〇年を以てヤクブベクの渴望せる伊犁を占領せり。但し露廷は之が領有を永久にするの意なく、若し代鎮の兵を送らば、直に之を渡さんことを清廷に通せり。然れども清は尙西域地方の叛亂に苦しみて如何ともする能はざ

リワヂヤ
條約

りしが、穆宗崩じて今上光緒帝の嗣立するに及び、漸く各地の反徒を定めて伊犁還附の事を露國に求め、先づ崇厚を派してリワヂヤの假條約を結ばしめたり。然るに其讓步過大にして物論大に起りしかば、帝は之を廢棄して更に曾紀澤を遣じ、償金九百萬ルーブルを出して現時の境界を確定せしめたり。時に西紀一八八一年なり。

清佛の衝突 初め安南阮福映帝嘉隆は阮文岳の叛亂を避けて、佛國の宣教師と共に暹羅に逃れ、化南嶋を割讓せんことを約して、援兵を佛國に求めたり。然るに福映の佛兵の援助を得て漸く安南を統一するや、前約を食みて頗る佛國の好意を失ひ、且つ爾後歴世天主教を惡みて其宣教師を虐待すること甚かりしかば、佛國は遂に之を伐ちて西貢附近の三州を取り、且つ東藩塞を定めて其保護國となせり。時に西紀一八五八年なり。

次で佛人は紅河航通事件に關して再び兵を安南に加へ、遂に其通

阮福映

西貢附
近の略

黃宗英

劉永福

クール
ベール

曾紀澤

フナリ

諒山

商を開かしめしかば、東京の知事黃宗英之を怒りて無謀の兵を起し、黒旗軍の首領劉永福を引きて佛人を擊攘せんことを圖れり。是に於て佛國は急に兵を進めて河内及南定を攻陥せしが、永福の黒旗軍を率ゐて河内を恢復するに及び、佛の東京理事官は安南政府を以て黒旗軍の首謀者となし、少將クールベールをして直に京城を犯さしめしかば、協和帝は止むを得ずして和を媾じ、安南を以て佛の保護國となすの約を結べり。

然るに清廷は從來の關係より、安南を以て其藩邦となし、曾紀澤を佛國に遣じて大に異議を唱へしめしが、佛國の總理フナリ固く執りて動かざりしかば、清廷遂に一步を譲りて安南の主權を放棄せり。

時に諒山の鎮臺は清兵の手中にありしかば、佛軍は約に従ひて之を占有せんとせしに、突然清の守兵の爲に襲撃せられたり。是に於

天津の和議

て佛人大に怒り、海陸二軍を發し、海軍はクールベールを將として福州に向はしめ、陸軍はテグルを將として鎮南關内に入らしめたり。偶、フーリー内閣仆れ、佛國の外政全く一變して東征の師を顧みざるに至りしかば、清將馮子材は之に乗じて諒山を略取せり。因て佛人は當初の意氣を抑へて清と和を天津に結び、僅に安南の主權を保有して師を班せり、時に西紀一八八五年なり。

日清の衝突

輒近日清の衝突は一は臺灣事件に關し、一は朝鮮

臺灣事件

事件に關して起れり。臺灣は康熙帝の時より既に清に屬したりしが、其東岸の住民は所謂生蕃にして、未だ清の治に浴せず、性猛惡にして往々害を日本人に加へしかば、日本政府は使を北京に派して之を詰問せしめたり。然るに清國政府は生蕃を稱して化外の民とし、巧に其交渉を避けしかば、日本政府は遂に意を決して兵を發し、西郷從道を將として悉く生蕃の地を討平せしめたり。

西郷從道

大久保利通

然るに清國政府は臺灣を失はんことを恐れ、急に前言を食みて異議を日本に通じ、速に其兵を撤せんことを要求せり。然れども日本政府は其前言に違へるを責めて敢て兵を撤せず、大久保利通を清廷に遣して蕃地の所屬を論難せしめしかば、清廷遂に之に屈して償金五十萬兩を出せり。時に西紀一八七五年にして、我明治八年に當れり。

清と朝鮮との關係

初め清朝の滿州より起るに當り、朝鮮は之と和を結びて兄弟の約を爲したりしが、また竊に明朝に通じて其指命を奉せしかば、清の太祖は兵を八道に進めて國王を江華島に逐ひ、太宗も亦尋で之を征し、國王をして降を瀋陽に請はしめたり。是に於て朝鮮は全く清の屬國となり、歴世其正朔を奉じて臣禮を執れり。

日本と朝鮮との關係

日本は壬辰の役を以て大に朝鮮に仇敵視せられたりしが、徳川氏の豊臣氏に代りて覇業を成すや、對馬の宗氏に命じて務めて之が

修好を計らしめ、日韓互に使聘を交換するに至れり、而して兩國の交通は徳川氏の衰微に伴ひて漸く稀疎に赴きしが、維新の際日本は更に天皇の名を以て修好の使を朝鮮に送りぬ。然るに朝鮮は無禮にも其書辭を疑ふて答ふる所あらざりしかば、日本は尙之を忍びて其開國を勸誘せり。

朝鮮の開國

明治十年の變

わが明治八年、朝鮮永宗島の砲臺は故なくして日本の雲揚艦を砲撃せしかば、日本は黒田清隆及井上馨を遣して其罪を問はしめ、且つ之を機として通商條約の事を嚴談せしめたり。是に於て朝鮮は其罪を陳謝して始めて通商條約を結び、仁川元山の二港を開きて互市場となせり。朝鮮は日清兩國に對して以上の如き關係を有したりしが、明治十年に至り、朝鮮王の父大院君は京城の鎮兵を煽動して王宮及外戚閔氏の第に寇せしめしに、亂兵は勢に乗じて遂に我公使館を襲

獨立黨事

明治十年の變

撃せり因て日本は井上馨を遣して韓廷に談ずる所ありしかば、韓廷は賠償金五十五萬圓を出し、又爾後日本の公使館に護衛兵を附するを承認せり。

日兵の京城に駐屯するに及び、清國も亦護衛兵を朝鮮に送りて、陰に日本の勢力を抑制せんとせり。是に於て朝鮮の政界は二大黨派に分れ、一は獨立黨と稱して日本に依頼し、一は事大黨と稱して清國に依頼せり。かくてわが明治十七年に至り、獨立黨の首領金玉均等亂を作して事大黨の領袖を暗殺し、國王を景祐宮に奉じて日本公使に擁護を請ひしかば、公使竹添進一郎は之に應じて王宮に赴けり。此時事大黨は清兵の援助を得て王宮に襲來し、且つ日本公使館をも焼却せしかば、日本は復井上馨を朝鮮に遣して、賠償金十三萬圓を出さしめ、後更に伊藤博文を清國に遣して、李鴻章と天津に會見せしめ、兩國互に朝鮮の兵を撤し、爾後若し之を出すの要起ら

天津條約

東學黨

日清の交戦

馬關條約

遼東半島の還附

は、必ず先づ相通告すべきを約せしめたり。是を天津條約と云ふ。明治十八年即ち西曆一八八五年

然るに明治二十七年に至り、朝鮮の南部に東學黨の亂起るや、韓廷は援兵を清國に請ひしかば、日本も亦兵を京城に出して我居留國民を保護せしめ、尋で公使大鳥圭介を遣して、清國と共に韓政の改革を圖らしめしに、清國欽差總辦袁世凱は朝鮮の獨立を忌みて之に應せざりしかば、兩國の平和は遂に破裂して、成歡及豐島の交戦となれり。

清國は兵を平壤に出して、日軍の北進を拒ぎしかば、日本は山縣有朋を遣して之を攻陥せしめ、尋で大に海陸二軍を進めて、悉く遼東半島を略取し、且つ威海衛を拔きて渤海の全權を握りしかば、清國は李鴻章を日本に派遣し、伊藤博文及陸奥宗光と馬關に會見して媾和の議を定めしめたり。即ち清國は朝鮮の獨立を認め、償金二億

兩を出し、遼東半島及臺灣澎湖の二嶋を割き、且つ沙市重慶蘇州杭州の四港を開くべきを約せしが、尋で日本は露西亞獨逸佛蘭西三國の勸告を納れて遼東半島を清國に還附しき。時に明治廿八年西曆一八九五なり。

中學
教程
東洋歷史
終

明治三十年十二月二十二日印刷
同 年十二月三十一日發行



著作者兼
發行者

右代表者

印刷者

發賣所

發賣所

發賣所

印刷所

東洋歷史

定價金 十五錢

附圖金 二十錢

東京市本所區綠町三丁目廿八番地

中等學科教授法研究會

東京市本所區綠町三丁目廿八番地

間中正修

東京市京橋區弓町二十三番地

橘磯吉

東京市日本橋區通油町十八番地

水野書店

東京市日本橋區本石町三丁目七番地

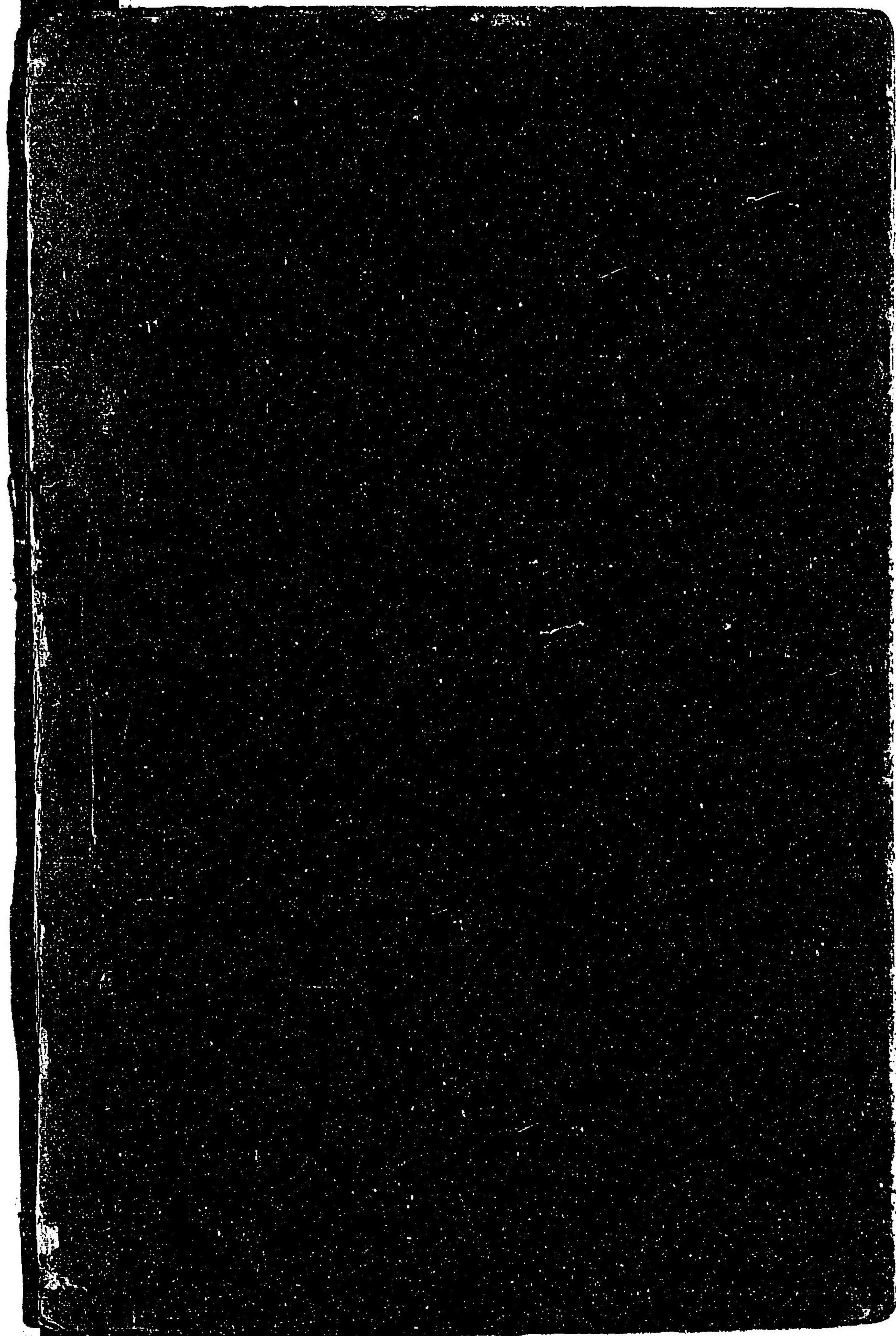
杉山書店

大坂市東區備後町四丁目

石井書店

東京市京橋區弓町二十四番地

三協合資會社



108

138

003394-001-6

108-138

東洋歴史

幸田 成友/校

M30

ACC-1917

